

平成 30 年度

講義要項

経営学研究科経営学専攻

博士後期課程

埼玉学園大学大学院

目 次

経営学特講（大江 清一）	1
経営組織論特講（文 智彦）	2
ヘルスケアサービス・マネジメント特講（一戸 真子）	3
地域企業論特講（加藤 秀雄）	4
国際経営特講（菰田 文男）	5
経営史特講（張 英莉）	6
マーケティング論特講（薄井 和夫）	7
労務管理特講（禹 宗杭）	8
財務会計特講（濱本 道正）	9
管理会計特講（成松 恭平）	10
国際会計特講（李 相和）	11
国際会計特講（近田 典行）	12
経営財務特講（箕輪 徳二）	13
I Rと企業情報特講（米山 徹幸）	14
租税法特講（望月 文夫）	15
貨幣論特講（奥山 忠信）	16
金融論特講（相沢 幸悦）	17
金融論特講（芳賀 健一）	18
国際金融論特講（本澤 実）	19
現代ファイナンス特講（関村 正悟）	20
リスク・マネジメント特講（富家 友道）	21
格付評価特講（黒沢 義孝）	22
ABS(仕組債)・金融機関格付評価特講（江川由紀雄・根本 直子）	23
民間企業・ソブリン格付評価特講（森田 隆大）	24
特別研究指導Ⅰ（箕輪 徳二）	25
特別研究指導Ⅰ（相沢 幸悦）	26
特別研究指導Ⅰ（李 相和）	27
特別研究指導Ⅰ（一戸 真子）	28
特別研究指導Ⅰ（奥山 忠信）	29
特別研究指導Ⅰ（加藤 秀雄）	30
特別研究指導Ⅰ（菰田 文男）	31
特別研究指導Ⅰ（張 英莉）	32
特別研究指導Ⅰ（文 智彦）	33
特別研究指導Ⅰ（望月 文夫）	34
特別研究指導Ⅰ（薄井 和夫）	35
特別研究指導Ⅱ（箕輪 徳二）	36
特別研究指導Ⅱ（相沢 幸悦）	37
特別研究指導Ⅱ（李 相和）	38
特別研究指導Ⅱ（一戸 真子）	39
特別研究指導Ⅱ（奥山 忠信）	40
特別研究指導Ⅱ（加藤 秀雄）	41
特別研究指導Ⅱ（菰田 文男）	42
特別研究指導Ⅱ（張 英莉）	43
特別研究指導Ⅱ（文 智彦）	44
特別研究指導Ⅱ（望月 文夫）	45
特別研究指導Ⅱ（薄井 和夫）	46
特別研究指導Ⅲ（箕輪 徳二）	47
特別研究指導Ⅲ（相沢 幸悦）	48
特別研究指導Ⅲ（李 相和）	49
特別研究指導Ⅲ（一戸 真子）	50
特別研究指導Ⅲ（奥山 忠信）	51
特別研究指導Ⅲ（加藤 秀雄）	52
特別研究指導Ⅲ（菰田 文男）	53
特別研究指導Ⅲ（張 英莉）	54
特別研究指導Ⅲ（文 智彦）	55
特別研究指導Ⅲ（望月 文夫）	56
特別研究指導Ⅲ（薄井 和夫）	57

授業概要

経営学特講では、企業経営の根源的な問題の一つである経営倫理の問題に対して、「倫理と企業者活動」の切り口からアプローチする。本講義では明治期から昭和初期にかけて活躍した代表的な企業者として渋沢栄一を取り上げる。渋沢の事績を通して日本資本主義の発展過程における、倫理思想に裏づけられた企業者活動を考察する。

授業計画

第1回	ガイダンス－講義計画－ 経営倫理について
第2回	渋沢栄一の事績と思想
第3回	渋沢研究史序論－研究史の整理－
第4回	渋沢の企業者活動(1)－渋沢の関与企業－
第5回	渋沢の企業者活動(2)－企業創立への関与－
第6回	渋沢の企業者活動(3)－株主総会への関与－
第7回	渋沢の企業者活動(4)－社外重役・外部者としての関与－
第8回	企業者活動と情報(1)－渋沢の情報活動－
第9回	企業者活動と情報(2)－出資と経営－
第10回	企業者活動と情報(3)－経営者層の啓蒙－
第11回	企業と資金活動(1)－渋沢の資金管理－
第12回	企業と資金活動(2)－渋沢の出資動向－
第13回	企業と資金活動(3)－資金と信用－
第14回	企業と資金活動(4)－第一銀行の経営－
第15回	演習のまとめ
第16回	定期試験

到達目標

本講義では、「企業倫理と企業者活動」に関する知識を高度なレベルで修得することを到達目標とする。これにより、いかなるテーマで博士論文を作成する場合でも、企業経営について倫理的側面から検討を加えるにあたって必要な知識と、その応用を可能ならしめる力量を蓄える。

履修上の注意

講師による講義形式を中心とするが、履修者の学問的興味が強いテーマに関しては、履修者がレポートする形式で演習を進める。発表後、テーマに沿って議論を行う。履修者は積極的に議論に参加することが求められる。

評価方法

本講義の内容に基づいたレポートの提出を求め、その評価を 60%加味する。また、各回で取り上げるテーマに関する発表内容、準備状況、議論への参画度等、演習に対する取り組み度合いによる評価を 40%加味する。

テキスト

参考書：島田昌和『渋沢栄一の企業者活動の研究』（日本経済評論社、2007年）。

授業概要

本講義では、優れた意思決定を行うための組織のあり方について講義する。

組織の存続と発展のためには優れた戦略が、優れた戦略のためには優れた戦略的意思決定プロセスが構築されなければならない。本講義では、優れた意思決定とりわけ戦略的意思決定を行うための組織のあり方について考察する。

授業計画

第1回	概要
第2回	意思決定の神話
第3回	意思決定の難しさ
第4回	戦略的意思決定とは
第5回	戦略的意思決定プロセスの諸モデル
第6回	戦略的意思決定プロセスに関する事例研究
第7回	戦略的意思決定プロセスに関する理論研究
第8回	コンティンジェンシー・アプローチ
第9回	戦略的選択アプローチ
第10回	社会的相互作用アプローチ
第11回	アクティビティ・ベースト・アプローチ
第12回	戦略的意思決定プロセスに関する実践理論
第13回	戦略的意思決定の改善のためのテクニック・スキル
第14回	意思決定プロセスの事例分析①
第15回	意思決定プロセスの事例分析②
第16回	総括

到達目標

理論について批判的視点から体系的に理解し、博士論文作成のための独創的な視点を養う。
理論に基づき事例を分析し、具体的な構想を提示する能力を構築する。

履修上の注意

事前に文献を読み理解し、授業内では積極的に議論に参加することを求める

評価方法

ディスカッション・プレゼンテーション・レポートにより評価

テキスト

指定しない

授業概要

本講義では、修士課程において習得した専門知識を更に発展させ、グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント理論の構築について学ぶ。特に、急速に展開するヘルスケアサービスに関するグローバル化について理解を深める。どの国がどのようなヘルスケアサービス問題を抱えているか、日本はどのような点が優れているか、各国の取り組みを総合して望ましいヘルスケアサービス・マネジメントはどうあるべきかについても理解する。また、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）の動向や医療の標準化や評価の流れについても学ぶ。

授業計画

第1回	グローバルな視点からみたヘルスケアサービス・マネジメント
第2回	ベストプラクティス/パフォーマンスとマネジメント
第3回	ヘルスケア・コンシューマー・オリエンティッド
第4回	WHO、OECD、The World Bank の役割
第5回	JICA、Bill & Melinda Gates Foundation の役割
第6回	グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント①：アメリカ
第7回	グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント②：イギリス
第8回	グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント③：ドイツ
第9回	グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント④：北欧諸国
第10回	グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント⑤：中国
第11回	グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント⑥：その他のアジア諸国
第12回	国際認証評価 JCI、ISQua
第13回	Policy、System、Universal Standards
第14回	Quality、Safety、Efficiency、Accessibility
第15回	UHC (Universal Health Coverage)
第16回	定期試験

到達目標

- ① グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメントの基本的視点が理解できる。
- ② 各機関の役割やアプローチが理解できる。
- ③ わが国のヘルスケアサービス・マネジメントの現状を客観的に分析できる。
- ④ ユニバーサル・ヘルスカバレッジ（UHC）について理解を深める。
- ⑤ 国際認証評価や医療の標準化で重要とされている視点について説明できる。

履修上の注意

グローバルな視点で医療について考える習慣をつけて欲しい。
欧米の文献を使用するので、英語力も身につけることを求める。

評価方法

レポートおよび発表 40%、試験 60%

テキスト

教科書は特に指定しない。必要に応じて適宜資料を配布する。

授業概要

本講義では、世界的な競争の中で海外企業との競争激化に直面している地域企業、中小企業、及び日本企業の今後の発展課題を、自動車、電機などに代表される量産領域の機械産業や、それらのものづくりを生産設備面で支えている半導体製造装置産業や工作機械産業、またかつては輸出産業として発展していた繊維産業などの実態分析を通じて講義する。また、受講者の研究テーマに関わる日本産業を取り上げ、その実態を講義することで研究内容を深めることに努める。

授業計画

第1回	講義内容についてのガイダンス
第2回	受講生の研究テーマと本講義について
第3回	自動車・電機産業における地域企業と中小企業の取引構造の変化 (1)
第4回	自動車・電機産業における地域企業と中小企業の取引構造の変化 (2)
第5回	自動車・電機産業における地域企業と中小企業の取引構造の変化 (3)
第6回	繊維産業とアパレル産業の困難と発展可能性 (繊維産地を中心に)
第7回	繊維産業とアパレル産業の困難と発展可能性 (アパレルを中心に)
第8回	繊維産業とアパレル産業の困難と発展可能性 (海外生産と商社の役割等について)
第9回	日本産業の国内外生産の行方 (1)
第10回	日本産業の国内外生産の行方 (2)
第11回	日本産業の国内外生産の行方 (3)
第12回	受講生の関心ある産業の実態と諸問題について (1)
第13回	受講生の関心ある産業の実態と諸問題について (2)
第14回	受講生の関心ある産業の実態と諸問題について (3)
第15回	受講生の関心ある産業の実態と諸問題について (4)

到達目標

地域企業、中小企業を学ぶことで、国内外の経済社会の変化と今後を展望できる能力を身につけ、論文作成の基本的な論点整理に繋がる分析力を備えることを目標とする。

履修上の注意

単に講義で学ぶという姿勢に終わることなく、自らの研究課題を踏まえ、積極的に議論することを求める。また、取り上げる参考文献等を単に読むだけでなく、それに対しての意見を持ち議論できるように準備することを求める。

評価方法

テーマに関しての報告、議論及び分析力に基づき判断する。

テキスト

必要に応じて、テーマに即した資料を配布する。

参考文献：

加藤秀雄『日本産業と中小企業－海外生産と国内生産の行方』新評論、2011年

加藤秀雄『外需時代の日本産業と中小企業－半導体製造装置産業と工作機械産業』新評論、2015年

授業概要

日本企業は消費の低迷とグローバル化(新興国の発展)などにより、業績の不振が続いている。日本企業がこのような低迷から抜け出し国際競争力を取り戻すためには、市場のニーズを明確に把握し、将来性のあるセグメントを明確にして選択と集中を推進することである。本講義では的確な選択と集中のために必要な、将来の技術トレンドの把握、消費者の欲求の把握などが、日本企業によってどのようにおこなうべきかを、代表的な複数の企業の事例を見つつ講義する。

授業計画

第1回	はじめに
第2回	選択と集中の学説研究(1) 総論
第3回	選択と集中の学説研究(2) プラハラード等
第4回	破壊的イノベーションの理論(1) 総論
第5回	破壊的イノベーションの理論(1) クリステンセン等
第6回	選択と集中の国際比較 日本企業 vs. 欧米企業
第7回	日本企業の実例と集中 (重電企業)
第8回	日本企業の実例と集中 (パナソニック等)
第9回	日本企業の実例と集中 (ソニー等)
第10回	日本企業の実例と集中 (ソニー等)
第11回	日本企業の実例と集中 (パナソニック等)
第12回	日本企業の実例と集中 (トヨタ自動車等)
第13回	今後の選択と集中分野 (IoT)
第14回	今後の選択と集中分野 (社会インフラ)
第15回	今後の選択と集中分野 (電気自動車)
第16回	まとめ

到達目標

日本企業の現状と課題についての高度な実証分析手法の習得。
選択と集中の将来の方向性についての独創的分析能力の育成。

履修上の注意

関連する学術文献を理解し、現在進んでいる日本企業の技術経営の動きについて日々フォローする努力が必要である。

評価方法

基本的に学期末テストによって評価するが(70%)、部分的に出席も考慮する(30%)。

テキスト

用いない。

授業概要

本講義では、いわゆる「日本的経営」の形成、変遷の過程を丹念に考察し、「日本的経営」の特質を考究する。戦後の日本企業は当時のアメリカ経営の姿を「普遍的で一般にあるべき姿」として捉え、経営者の多くはアメリカの経営から貪欲に学び、その経営モデルに接近しようとした。しかし、その過程に日本で出来上がった経営方式はアメリカの模倣ではなく、またその他の国とも異なった極めて「日本的」な特徴をそなえたものであった。本講義では「日本的経営」のこれまでの研究を概観したうえで、戦後日本企業における「集団主義」、「集団的行動」をメインテーマとして取り上げる。また「日本的経営」との関連で、アジア、特に中国の企業経営史の特徴と問題点について、「日本的経営」との比較を念頭に併せて講義する。

授業計画

第1回	ガイダンス（授業方法、授業計画、到達目標、評価方法、基本文献の紹介など）
第2回	「日本的経営」とは何かⅠ 「日本的経営」の源流
第3回	「日本的経営」とは何かⅡ ジェームズ・アベグレン『日本の経営』における論点：「三種の神器」説の影響と限界
第4回	「日本的経営」とは何かⅢ 研究の系譜と論点の整理
第5回	「日本的経営」と伊丹敬之の「人本主義」
第6回	「日本的経営」と加護野忠男の「愚直の経営」
第7回	日本企業のアメリカ経営手法への接近と揚棄Ⅰ アメリカ的経営管理方式の導入過程
第8回	日本企業のアメリカ経営手法への接近と揚棄Ⅱ アメリカ的経営手法の吸収と改良
第9回	日本の経営組織と日本的集団行動の特質Ⅰ
第10回	日本の経営組織と日本的集団行動の特質Ⅱ
第11回	JITと集団主義的経営——価値の共有とモチベーション
第12回	中国国有企業の組織と個人の関係Ⅰ 改革開放前後の変化
第13回	中国国有企業の組織と個人の関係Ⅱ 日・米・中の比較
第14回	「日本的経営」の海外移転
第15回	「日本的経営」と企業経営のグローバル化
第16回	期末試験

到達目標

本講義を通じて、修士課程で習得した知識をもとに、戦後復興期から高度成長期までの日本の経済・経営発展の全般をより広く深く理解し、グローバル経営の観点から「日本的経営」を認識し、独創性豊かな自立した研究者に必要な素養を身につけることができるようになる。

履修上の注意

指定された文献を通読し、与えられた課題を完成し、自分の考えや意見を積極的に述べることが要求される。

評価方法

課題への取組み 60%、学期末試験 40%の配分割合で評価する。

テキスト

テキストならびに参考文献は授業中に適宜指示する。

授業概要

これまでのマーケティング論の射程を超え、マーケティングの歴史研究や、消費文化理論（Consumer Culture Theory, CCT）、言語学の語用論における関連性理論、状況的認知論、状況的学習論、実践としての戦略研究や実践としてのマーケティング研究など、マーケティング研究でなお十分に着目されていない関連諸分野の知識を動員し、マーケティングの現場を分析する新たな理論視角を構築するための素材を選択し、その内容を理解できるように指導する。

授業計画

第1回	ガイダンス
第2回	マーケティング歴史研究の現在（1）
第3回	マーケティング歴史研究の現在（2）
第4回	マーケティングの新分野としての消費文化理論（1）
第5回	マーケティングの新分野としての消費文化理論（2）
第6回	マーケティングの新分野としての消費文化理論（3）
第7回	マーケティングの新分野としての消費文化理論（4）
第8回	マーケティング・コミュニケーションと関連性理論（1）
第9回	マーケティング・コミュニケーションと関連性理論（2）
第10回	消費者行動研究と状況的認知論（1）
第11回	消費者行動研究と状況的認知論（2）
第12回	消費者行動研究と状況的認知論（3）
第13回	消費者行動研究と状況的認知論（4）
第14回	マーケティングの非公式組織としての実践コミュニティ（1）
第15回	マーケティングの非公式組織としての実践コミュニティ（2）

到達目標

マーケティングの新しい研究動向を理解すること。関連諸分野における新たな理論展開を理解し、マーケティングの新しい理論的分析視角へとつなげること。

履修上の注意

新たな研究動向を把握するために、英文の文献検索は必須である。各自 e-journal で新しい文献を検索できるようにすることが必須である。

なお、遅刻、無断欠席は厳禁のこと。

評価方法

授業態度20%、授業への貢献（発言等）30%、期末レポート50%によって評価する。

テキスト

<参考文献>

薄井和夫「マーケティング史研究におけるマーケティング概念の多義性について」拓殖大学『経営経理研究』第106号、2016年、169～207ページ。

Kazuo Usui, *The Development of Marketing Management: The Case of the USA c. 1910-1940*, Aldershot, UK: Ashgate, 2008.

Kazuo Usui, *Marketing and Consumption in Modern Japan*, Abington, UK: Routledge, 2014.

授業概要

本講義では、労務管理のコアをなす報酬に焦点を合わせ、これから求められる報酬を、参加者とともに設計する。従来、報酬論は、日本は特殊だとする前提のうえで築き上げられてきた向きがある。たとえば、賃金の決め方については、世界のほとんどの国が職務基準賃金なのに、日本は属人基準賃金だとする主張が強まってきた。一方、賃金の上がり方については、ブルーカラーにまで適用される、日本の査定つき定期昇給は、労働者の知的熟練形成を促す点で、世界でも先進的だとする言説が広く受け入れられてきた。本講義では、(1) 報酬の現状、(2) 世界の報酬制度、(3) 日本における報酬の歴史的な変化をふまえ、従来の議論を相対化したうえで、(4) 今後求められる報酬をデザインする。

授業計画

第1回	「賃金の決め方」の検討
第2回	「賃金の上がり方」の検討
第3回	報酬の現状：水準および制度
第4回	アメリカの報酬
第5回	ヨーロッパの報酬
第6回	アジアの報酬
第7回	日本における変化（その一）：年功給から能力給へ
第8回	日本における変化（その二）：能力給から役割給へ
第9回	報酬を規定するもの（その一）：市場
第10回	報酬を規定するもの（その二）：組織
第11回	報酬の要素（その一）：能力
第12回	報酬の要素（その二）：インセンティブ
第13回	報酬の要素（その三）：生活
第14回	求められる報酬のデザイン（その一）：アイデンティティの追求
第15回	求められる報酬のデザイン（その二）：向上への働きかけ
第16回	期末試験

到達目標

- ①報酬の現状を把握する。
- ②報酬とかわる理論的課題について理解を深める。
- ③新たな報酬制度を自らデザインする。

履修上の注意

本講義では、報酬に重点をおくものの、インセンティブなど応用範囲の広い概念を取り扱い、参加者とともに制度のデザインを試みることで、参加者自身の研究にも役立てることをめざす。自らオモシロイ授業を作りたいと思う人の参加を期待する。

評価方法

授業への通常の参加とディスカッション、研究報告、課題提出などに基づき、総合的に評価する。

テキスト

特に使用しない。参考としては、禹宗杭「アジアの賃金—『学歴別・熟練度別賃金』—」社会政策学会第135回大会報告、2017年のほか、関連する文献や資料を授業中適宜提示する。

授業概要

金融のイノベーションと資本市場のグローバル化が、世界の財務会計制度を急速に変えつつある。国際財務報告基準（IFRS）に象徴されるように、グローバル化時代の会計基準は、収益費用アプローチから資産負債アプローチへの会計観の転回として特徴づけられる。本講義では、修士課程で講義した資産負債アプローチに基づく会計諸基準の知識を踏まえて、博士論文の作成に必要な水準に理論を深化させるとともに、現実問題の実証分析に必要な技法を習得させることを目標とする。具体的には、「金融商品」、「公正価値測定」、「収益認識」など、資産負債アプローチに基づく先端的な会計基準の計算構造とその基礎をなす概念フレームワークを体系的に講義する。その上で、ディスクロージャー制度で開示される会計情報を実証的に分析するための技法について講義する。

授業計画

第1回	ガイダンスー受講生の問題関心の確認、テキストの紹介ほか
第2回	グローバル化の中での会計研究の方向性
第3回	財務会計における「理論と実証分析」の概要
第4回	経済社会のインフラとしての財務会計制度
第5回	財務会計の法的規制と会計基準の体系
第6回	会計基準の基礎をなす概念フレームワーク
第7回	損益認識と資産・負債評価の関連性（アーティキュレーション）
第8回	収益費用アプローチと資産負債アプローチ
第9回	純利益と包括利益ー理論分析と実証成果
第10回	負債と資本の概念的分析
第11回	条件付持分請求権の会計
第12回	財務諸表の表示ー営業・投資・財務の活動別表示
第13回	収益認識ー実現稼得モデルと顧客契約モデル
第14回	金融商品会計と公正価値測定
第15回	会計情報の実証的分析
第16回	定期試験

到達目標

- ① 博士論文の作成に必要なレベルの会計理論と実証分析に関する知識および技法を習得する。
- ② グローバル化の中での先端的な会計問題（金融商品や収益認識）について分析力を深める。
- ③ 会計情報と金融・資本市場との関係について実証的に分析する仕方を身につける。

履修上の注意及び予習・復習

- ① テキストに基づきながら、必要に応じて有価証券報告書や新聞記事等の補助教材（プリント）を配布して講義・ディスカッションを行う。
- ② 講義形式を基本とするが、受講生に課題を与えて発表してもらうことがある。
- ③ 授業 90 分に対して最低でも 3 時間程度の予習・復習に努めること。

評価方法

- ① 受講状態（質疑応答など授業への参加姿勢が積極的かどうか） 40%
- ② 期末試験またはレポート報告（テキストの分担報告や財務データによる実証分析の優劣） 60%

テキスト

受講生の研究テーマに応じて、授業中に適宜指示する。

〈参考文献〉

大日方 隆『アドバンスト財務会計』中央経済社
 Scott, W.R., *Financial Accounting Theory*, Pearson

授業概要

管理会計は、経営管理に有用な会計情報を提供することを目的とする。しかしそれは特定の計算制度や計算技法を意味するものではない。それは経営管理に役立つ様々な会計技法や概念を包摂したその総体を意味するものである。本講座では、これまで管理会計分野で開発されたきた会計技法について取り上げるとともに、現在の経営環境において重要とされている経営戦略とのかかわりのなかで管理会計技法をどのように役立たせることができるかを講義する。たとえば、活動基準原価計算、品質原価計算、スループット会計、原価企画、マテリアルフローコスト会計などを取り上げながら、当該企業にとって適切な管理会計システムとは何かを講義する。

授業計画

第1回	ガイダンスー管理会計で何ができるか
第2回	現代の経営環境の変化と新しいコストマネジメント概念の利用
第3回	利益計画について
第4回	予算について
第5回	予算について
第6回	予算について
第7回	コストマネジメントシステム
第8回	コストマネジメントシステム
第9回	コストマネジメントシステム
第10回	標準原価計算：直接材料費と直接労務費
第11回	標準原価計算：製造間接費
第12回	生産性の管理とマーケティング効果の管理
第13回	マネジメントコントロールと戦略的業績尺度
第14回	戦略的投資単位と振替価格
第15回	管理者の報酬と企業評価
第16回	定期試験

到達目標

- ・博士論文作成のために必要な基本的な理論と技法の修得
- ・現代の企業が抱えている様々な問題を管理会計の視点からアプローチできる

履修上の注意及び予習・復習

とくに管理会計の知識はなくともよいが、企業の経営管理について深く考えておいて欲しい。また、授業で指定した文献以外にも関連する多くの事例・文献がありますので、積極的に調査・研究をすることを求める。

評価方法

授業における参加態度と課題提出物、および期末試験の総合評価

テキスト

レジュメあるいは関連する論文コピーを配布する
(参考文献)
受講生の研究テーマに応じて適宜指示する。

講義概要

財務会計における近時の動向は、投資家の意思決定に有用な会計情報の提供に関して、投資環境のグローバル化を背景として、ドメスティックな制度をもとにしたものではなく、国際的に共通したルールにもとづく、インターナショナルな比較可能性、同一の尺度性を有する情報提供へと移行しつつある。そのような国際環境にもとづく会計基準である IFRS について講義する。

講義計画

履修者の学習進度との兼ね合いで、以下の予定(・内容)を一部修正することがあります。

第1回	授業内容の概要(シラバス)、評価の方法に対する説明など
第2回	財務会計の基礎
第3回	IFRS(国際財務報告基準)の基礎
第4回	IAS 第2号—Inventories・棚卸資産
第5回	IAS 第16号—Property, Plant and Equipment・有形固定資産
第6回	IAS 第17号—Leases・リース
第7回	IAS 第38号—Intangible Assets・無形資産
第8回	IAS 第40号—Investment Property・投資不動産
第9回	中間総まとめ講義
第10回	IAS 第31号—Interests in Joint Ventures・ジョイント・ベンチャーに対する持分
第11回	IAS 第21号—The Effects of Changes in Foreign Exchange Rates・外国為替レート変動の影響
第12回	IAS 第18号—Revenue・収益(改訂)
第13回	IAS 第23号—Borrowing Costs・借入費用
第14回	IFRS 第9号—Financial Instruments・金融商品
第15回	最終総まとめ講義

到達目標

インタラクティブな授業を前提とした進め方で、国際会計である IFRS について理解する。

履修上の注意

大学院の授業という性格上、一方的な講義というよりも、ある程度基本的な会計の知識があるほうが便宜であるが、事前に授業の都度、基礎的な参考書等で補う形で参加することも可能である。仔細については、履修者と個別に相談しながら習熟度や関心に沿って進行していく予定である。

評価方法

授業に対する参加度、研究報告・課題の提出などにもとづき総合的に評価を行う。

テキスト

IFRS 基準書を使用するほか、参考／研究書としては、履修メンバーや会計に対する習熟度などを勘案し、履修者と相談の上、初回授業時に指示する。

授業概要

本講義の目的は修士課程での国際会計特論の講義の水準を発展・進化させることを踏まえて、論文作成に必要な国際会計論の理論を学ぶことである。IFRS 適用には資産と負債における公正価値の評価範囲の拡大と包括利益の表示による利益概念の変化に対処することが要求される。この講義では、こうした問題意識を持って、IFRS 適用企業を中心に財務諸表の事例分析を通して、IFRS と日本基準との理論的関連性を分析するとともに、IFRS 適用のあり方や日本の企業会計の国際的に対応するための手法を講義する。

授業計画

第 1 回	国際会計基準（IFRS）の意義とその特徴
第 2 回	会計国際化の変遷と IFRS 適用の状況
第 3 回	日本基準の固有性と IFRS との関連性分析(1)
第 4 回	日本基準の固有性と IFRS との関連性分析(2)
第 5 回	公正価値会計の特徴と論点整理
第 6 回	公正価値会計の適用上の個別論点
第 7 回	公正価値評価とその影響分析の争点
第 8 回	会計観の相違と利益概念の変化との関連性
第 9 回	包括利益の概念と論点整理
第 10 回	包括利益の導入と業績報告
第 11 回	IFRS 適用企業の実態分析とその検討(1)
第 12 回	IFRS 適用企業の実態分析とその検討(2)
第 13 回	IFRS 適用企業の実態分析とその検討(3)
第 14 回	IFRS 適用企業の実態分析とその検討(4)
第 15 回	日本における IFRS 適用の課題とその可能性の検討
第 16 回	定期試験

到達目標

- ・ 博士論文の作成に必要な会計理論と制度分析に関する知識の習得
- ・ グローバル化に伴う国際会計問題についての分析力の向上
- ・ 会計制度の国際的動向や会計情報の分析能力の習得

履修上の注意

- ・ 授業の進め方は講義形式と受講生による発表を中心とする。
- ・ 自己の論文テーマに関する予習復習に務めること。
- ・ 授業での積極的な貢献が求められる。

評価方法

期末試験またはレポート報告 60%、授業での積極性（報告の内容及び質疑応答など） 40%

テキスト

- ・ 開講時に指示する。
- ・ 必要に応じて関連資料を配布する。

授業概要

戦後日本の株式会社の財務活動の諸問題を解明する。とくに、戦後の株式会社の財務政策を歴史的に鳥瞰し、バブル経済崩壊後の、デフレーション経済下での財務活動を分析的に講義する予定である。株式会社の財務活動の理解は、株式会社の経済理論、会社法の財務関連条項が基底をなす。このため、株式会社の理論の上に、このたび施行された、新会社法の財務関連条項の理解から始める。新会社法は、株式会社の財務関連事項が大幅に改正された。その条項の細則である「会社法施行規則」、「会社計算規則」および「電子広告規則」が2006年2月7日に公布された。新会社法では、資本制度、剰余金制度、株主への分配制度等大幅に改正され、その規制の理解は難解である。講義では、できるだけ、これらの財務関連制度の歴史的変遷・背景の理解を通じて、その時代の会社の財務政策のあり方の理解を得ることに努める。そして、戦後の株式会社の財務活動・政策を資本構成（財務体質）の側面から分析的に解明を試みる予定である。

授業計画

第1回	経営財務論特義とは、株式会社財務とは
第2回	株式会社の経済機能論争Ⅰ（金融論）
第3回	株式会社の経済機能論争Ⅱ（経営学）
第4回	剰余金の分配、分配可能額と配当施策
第5回	資金調達としての株式制度と自己株式
第6回	WACCの算定と資本コスト
第7回	将来期待収益、現在価値、正味現在価値と投資価値
第8回	資金調達としての社債制度、新株予約権制度
第9回	信用格付けと債権者保護制度－証券化商品の格付けの失敗とその後の法規制－
第10回	戦後日本の資本構成と財務体質Ⅰ（1975年まで・借入金依存）
第11回	1972以降の直接金融転換への金融経済市場の変化と資本構成の変化Ⅱ（直接金融と自己金融の併存）
第12回	バブル崩壊後の銀行の不良債権処理、銀行のBIS規制、銀行融資の変化と1997年以降の大手銀行の再編統合Ⅲ（政府・日銀による巨大信用供給）
第13回	近年の企業再編法制（M&A）と資本結合制度Ⅳ（株主・市場重視の資本政策転換）
第14回	リーマン・ショック後の会社の財務体質分析視点と財務分析指標
第15回	国際競争下での会社価値を高める財務政策

履修上の注意

会社法、企業会計、証券市場論、金融論、簿記論の講義を履修していることが望ましい。資料を用い講義形式でやるが、時々報告してもらい、討論をしたいとも考えている。

評価方法

提出物と報告等による総合評価。

テキスト

箕輪徳二・三浦后美編著『株式会社の財務・会計制度の新展開』泉文堂 2011年

授業概要

今日の企業にとって、規制上の情報開示はもちろん、株主・投資家など市場に向けた任意の情報発信（IR）に対する取り組みは経営の大きな課題の1つです。本講では、米国や欧州における IR 活動の歴史的な展開を具体的に追って、英米の規制当局、証券アナリスト、グローバル投資家、議決権行使助言業者など市場参加者の役割と課題をそれぞれ明らかにし、投資と企業経営の短期主義を問い、市場を駆け巡る企業情報が直面する課題を考察する。

授業計画

第1回	投資家向け広報（IR）活動の始まりと展開（1）全米 IR 協会（NIRI）の 50 年
第2回	（2）英国 IR 協会（IRS）の IR ベストプラクティス
第3回	証券規制の展開（1）米国：公平規則の施行と裁事例
第4回	（2）〃の進展
第5回	（3）EU：金融商品市場指令（MAR）、市場阻害行為規制（MAD）
第6回	証券アナリスト（1）その役割と歴史的進展
第7回	（2）業績予想コンセンサスとアナリストの外部評価
第8回	グローバル投資家（1）DR（預託証券）市場の進展
第9回	（2）株主 ID（実質株主）と投資家ターゲティング
第10回	（3）モノ言う株主、ESG 投資家
第11回	議決案助言業者（1）エイボン・レター、ISS の始まりと進展
第12回	（2）議決権案件の動向と課題
第13回	投資の短期主義（1）リーマンショックと空売り規制
第14回	（2）英 FRC（財務報告評議会）の活動
第15回	日本企業の課題：（1）2 つのコード（2）フェア・ディスクロージャー・ルールを導入
第16回	発表と議論

到達目標

博士論文の作成に必要な金融証券市場の基本的な理解

履修上の注意及び予習・復習

講義での論点を事前に整理しておきたい。

日々の企業情報や証券市場に関心をもって、講義に積極的に臨んでください。

評価方法

講義への出席や質問応答（50%）、提出された課題の報告（50%）で判断する。

テキスト

米山徹幸「イチから知る！ IR 実学」（日刊工業新聞社）

講義向けに PP 資料を用意し、参照する文献も適宜、指示します。

授業概要

租税法に関する知識の確認を行うとともに、他の法律（憲法・行政法・民法など）および隣接科学（経済学・経営学など）の基本を理解することを目標とする。また、わが国租税法の歴史的経緯・制度の概要だけでなく、欧米の租税法についてもその基本を理解することとする。そして、今日社会の中で租税の果たす役割を確認する。その上で、自己の博士論文テーマに関する事項については、特に深い知識を修得することを目標とする。

授業計画

第1回	講義についてのガイダンスと打ち合わせ
第2回	租税法律主義と租税公平主義
第3回	わが国租税法の歴史（戦後を中心に）
第4回	シャープ勧告の意義
第5回	租税法と信義誠実の原則
第6回	租税回避の意義
第7回	租税回避における法解釈（限定解釈を中心に）
第8回	租税法における紛争解決（審査請求・裁判・仲裁）
第9回	申告納税制度と源泉徴収制度
第10回	所得税の理論的根拠
第11回	法人税の課税ベース
第12回	法人税における時価主義
第13回	国際課税の基本的仕組み（欧米諸国との制度比較）
第14回	租税条約の意義
第15回	国際的租税回避
第16回	定期試験

到達目標

- ①博士論文の作成に必要な基本的な制度趣旨・意義の修得。
- ②租税法と現代社会との関係について理解を深める。
- ③法解釈の基本を身につける。

履修上の注意及び予習・復習

- ①自己の論文のテーマに関する分野については、予習が必要であり、授業での積極的な貢献が求められる。
- ②それ以外の分野についても、十分な復習が必要である。
- ③研究の幅を広げるために受講する場合、租税法と隣接する学問分野との関係に留意すべきである。

評価方法

- ・平常点50%、課題レポート50%。

テキスト

- ・開講時に指示する他、適宜関係資料を配付する。

授業概要

本講義では、博士前期課程での講義を深化・発展させ、博士論文の水準に必要な高度な知識の習得を目指す。近年繰り返し起っている通貨危機の対応策として、先行する諸理論の有効性と問題点を講義する。貨幣に関する諸理論については、貨幣システムが多様化していることを踏まえて、本質論・機能論・貨幣数量説を中心に講義する。現実の通貨危機の課題、特にアジア通貨危機とリーマン・ショック後のドル体制の不安定化の問題を踏まえて、基軸通貨のあり方と通貨量の管理の問題を講義する。さらに通貨危機の対応策としてのアジア統一通貨の可能性と国際通貨制度改革の方向性を講義する。なお、授業中、受講学生の研究テーマに対応した研究論文について適宜取り上げ講義する。

授業計画

第1回	講義に関するガイダンス
第2回	貨幣本質論と信用貨幣の発展
第3回	貨幣の機能と進化
第4回	貨幣数量説の有効性と課題
第5回	貨幣量管理の諸問題
第6回	中央銀行券と政府紙幣の差異に関して
第7回	国際基軸通貨とシニョレッジの問題
第8回	ドル基軸通貨論の限界と方向性
第9回	変動相場制の意義と問題点
第10回	地域統一通貨論—最適通貨圏論の意義と限界
第11回	地域単一通貨ユーロの形成と問題
第12回	アジア通貨危機—変動相場制と固定相場制の併存
第13回	アジア統一通貨の意義と方向性
第14回	金本位制復活論の意義と限界
第15回	国際決済通貨としての SDR・バンコールの可能性
第16回	定期試験

到達目標

本講義では、とりわけ通貨問題の重要性が増している状況に鑑み、貨幣論に関して、博士前期における研究を深化・発展させ、博士論文の作成に必要な高度な理論と分析力を習得し、独創性のある視点から問題を解決する能力を育成することを目標とする。

履修上の注意及び予習・復習

授業中に取り扱う研究論文と原典について十分な予習と行うこと。また、本講義を併せて、金融論特講、国際金融論特講を受講することが望ましい。授業中、受講生の研究状況に応じて課題を指定するので積極的に取り組むこと。

評価方法

授業および課題への取り組みと定期試験によって評価する。

テキスト

授業中に適宜関連文献を紹介する。

授業概要

いわゆるアベノミクスのもとで、円安が進み、株価も上昇してきました。景気も上向き、消費者物価上昇率もプラスに転じたことで、長かったデフレもようやく終息に向かうことが期待されています。しかし、2%の消費者物価上昇率は実現できないようです。

本講義では、日本銀行の金融緩和が中心であるアベノミクスというのは、いったいどんなものなのかを明らかにします。そのために、戦後の金融システムの特徴を明らかにした上で、日銀の金融政策を考えます。

世界は、リーマン・ショックで百年に一度という経済・金融危機に見舞われました。各国政府と中央銀行による超低金利(ゼロ金利)や大規模な資金供給でとりあえず終息しました。しかしながら、景気の低迷が続き、欧州債務危機などが起きたので、欧州中央銀行(ＥＣＢ)が危機対策で前面に出てきます。アメリカの中央銀行(ＦＲＢ)は、徹底的な金融緩和(ＱＥ)をおこなってきました。ＥＣＢもＱＥに踏み切りました、

ＦＲＢは、2014年10月にＱＥを終了し、ゼロ金利も15年12月に終わりました。米トランプ政権の登場で世界経済やアメリカ経済は大きく変わりつつあります。ＥＣＢも17年11月に量的緩和を終了しました。

本講義では、資本主義の現段階で各国中央銀行が前面に出ざるをえなくなっていること、各国中央銀行による徹底的な金融緩和などの金融政策の本質について皆で考えます。

授業計画

第1回	金融システムの概要
第2回	戦後日本の金融システム
第3回	高度成長終結と資産バブル
第4回	平成金融不況と金融ビッグバン
第5回	デフレ下の日本銀行の金融政策
第6回	デフレ克服とインフレターゲット論
第7回	欧米の資産バブル発生
第8回	世界金融危機の勃発
第9回	米中央銀行(ＦＲＢ)のＱＥ
第10回	欧州債務危機の勃発
第11回	欧州中銀(ＥＣＢ)のＭＭＬＲ
第12回	ＥＣＢのＱＥ
第13回	日本銀行の異次元緩和
第14回	米トランプ政権と財政出動
第15回	金融システムのあり方

到達目標

資本主義の現状において、中央銀行が前面に登場せざるをえなくなってきた根拠、ゼロ金利、マイナス金利、量的緩和などについて理解してもらうことを到達目標とします。

履修上の注意及び予習・復習

現実の日米欧金融システムと中央銀行の金融政策について取り上げるので、新聞をよく読んでください。

評価方法

適宜おこなってもらう報告(50%)、積極的な質問、意見の提示(50%)など、講義への参加状況に基づいて総合的に評価します。

テキスト

とくに指定しません。参考書は、適宜紹介します。

授業概要

博士前期課程での学習を踏まえて、本講義では金融システムの構造と動態に関する知識を、特に中央銀行の金融政策に力点を置いて深化させる。金融政策の方式と効果については、標準的なマクロ経済理論と中央銀行の実務者のアプローチにはかなりの乖離がある。この乖離について、実務と理論を総合する見地に立って、理論と実証の両面から、また具体的には日本とアメリカ合衆国の金融政策を比較しつつ考察する。最終目標は21世紀の金融政策を構想することにある。

授業計画

第1回	講義の構成と概要
第2回	金融レジームと資本蓄積レジーム—概論
第3回	中央銀行の金融政策（1）理論
第4回	中央銀行の金融政策（2）実際
第5回	中央銀行の金融政策（3）批判的統合
第6回	日本銀行の金融政策—復興期
第7回	日本銀行の金融政策—高度成長期
第8回	日本銀行の金融政策—安定成長への移行期
第9回	日本銀行の金融政策—バブルとその崩壊期
第10回	日本銀行の金融政策—デフレ下の混迷期
第11回	アメリカ連邦準備制度の金融政策—1970年代まで
第12回	アメリカ連邦準備制度の金融政策—ボルカー時代
第13回	アメリカ連邦準備制度の金融政策—グリーンスパン時代
第14回	アメリカ連邦準備制度の金融政策—バーナンキ時代から現在まで
第15回	21世紀の金融政策
第16回	定期試験

到達目標

本講義では資本蓄積レジームにおける金融レジームの動態について、中央銀行の金融政策に力点を置いて考察する。金融政策の理論と実際の乖離に注目し、通説に批判的にアプローチして、博士論文作成に欠かせないオリジナルな分析能力と構想力を育成する。

履修上の注意及び予習・復習

必要な文献を予め指定するので必ず予習して出席し、積極的に問題を提起し議論すること。

評価方法

授業への取り組みと数回のレポート、および定期試験を総合して判定する。

テキスト

英語論文を含む関連文献を講義の進行に合わせて、適宜指定する。2だけ挙げておけば、次の通りである。

Eckhard Hein and Engerbert Stockhammer eds., *A Modern Guide to Keynesian Economics and Economic Policies*, Northampton, MA: Edward Elgar.

Marc Lavoie, *Post-Keyensian Economics: New Foundations*, Northampton, MA: Edward Elgar.

授業概要

本講義では、修士課程における研究を深化・発展させ、国際金融論に関する高度な学術研究能力の習得を目標とし、博士論文作成に必要な水準の理論・歴史及び制度を講義する。1980年代のアメリカの商業銀行・S&Lの不良債権問題の実態を分析し、不良債権処理と国際金融危機との関係、具体的には中南米の累積債務問題とアメリカ共和党政権の対応とその成果を講義する。この分析を踏まえ、サブプライム危機による不良債権問題とリーマン・ショックによる国際金融危機の深化とその対策を講義する。なお、講義中、受講生の研究課題に即して適宜必要な学術論文を取り上げる。

授業計画

第1回	国際通貨・金融に関する理論（1）－国際通貨論と基軸通貨体制の揺らぎ
第2回	国際通貨・金融に関する理論（2）－為替理論、国際収支理論
第3回	変容する国際金融－ドル危機とブレトンウッズ体制の崩壊の教訓
第4回	国際金融市場の変容－為替相場とグローバル・インバラン
第5回	世界金融危機の契機となった不良債権問題
第6回	国際金融危機の原点としての1980年代の中南米債務問題
第7回	中南米累積債務問題と債権の証券化－ブレディプランの有効性の検討
第8回	グローバル・インバランスとサブプライムローンの証券化の破綻問題
第9回	アメリカの資産の証券化の失敗と金融規制－ドット・フランク法の成立
第10回	金融市場の不安定化の常態化問題
第11回	欧州の国債危機と金融危機
第12回	欧州の金融機関の不安定化問題とバーゼル合意
第13回	世界的金融危機と各国の金融規制
第14回	金融グローバリゼーションの問題点と金融市場の不確実性への対策
第15回	国際金融の新たな潮流～仮想通貨について
第16回	定期試験

到達目標

本講義では、修士課程における研究を深化・発展させ、国際金融市場が抱える今日的課題に鑑み、博士論文の作成に必要な国際金融に関する高度な理論と分析力を習得し、独創性のある視点から問題を解決する能力を育成することを目標とする。

履修上の注意

授業中に取り扱う研究論文と原典について十分な予習と行うこと。また、本講義を併せて、金融論特講、貨幣論特講を受講することが望ましい。授業中、受講生の研究状況に応じて課題を指定するので積極的に取り組むこと。

評価方法

- ① 授業中の発言内容など平常点
- ② 課題に対するレポートの評価点

テキスト

授業中に指示する

参考文献：本澤実『国際金融システムの再構築』（御茶の水書房）

授業概要

現代ファイナンス理論の基礎的思考法とその具体的分析手法を学ぶ。モダンポートフォリオ理論を基礎とする意思決定理論およびリスク管理論への応用、デリバティブ、債券を中心とする価格評価理論、信用リスクの評価理論を主とした講義を行う。受講者の研究テーマとの関連でトピクスやテーマの時間的ウエートは調整する。

授業計画

第1回	取引市場の機能と構造、リスクの配分、合理的選択の理論
第2回	不確実性下の意思決定 リスクとリターン、MVアプローチ
第3回	機関投資家の投資行動とポートフォリオ管理、
第4回	アセットアロケーションの考え方と手法
第5回	ALM の考え方と其の手法
第6回	リスク管理とその手法 基礎概念、ボラティリティと相関
第7回	債券価格の決定と金利、金利の期間構造モデル
第8回	スワップの基礎、LIBO, イールドカーブ分析
第9回	金利デリバティブ—短期金利モデルとHJM モデル
第10回	社債価格と信用リスクと信用スプレッドの説明、
第11回	信用リスクモデル—KMVモデル—オプション理論的アプローチ
第12回	デフォルト確率の推定
第13回	デフォルト損失とデフォルト相関、信用格付け推移、
第14回	信用VAR
第15回	信用デリバティブ—CDS, CDOの評価
第16回	定期試験

到達目標

1. 合理的意思決定モデルとしての MPT モデルの理解。2. 資産価格理論の理解。3. 信用リスクの概念を理解しその測定と様々な手法をかつようできること。

履修上の注意及び予習・復習

毎回の宿題の発表、予習上の指定テキスト、論文を読んでまとめておくこと

評価方法

期末のレポート論文 60%、授業での発表および宿題の提出 40%

テキスト

ファイナンシャルエンジニアリング：ジョンハル 三菱証券商品開発部 訳 キンザイ

授業概要

本講では修士課程での知見を深化・発展させ、リスク管理の企業経営への適用について講義を行う。ここ数年で世界の様相は大きく変化し、日本企業が進出乃至は市場とする各国においても自然災害、テロ、金融市場の混乱等の様々な形態の危機が発生してる。こうしたリスクに適切に対応し企業活動を円滑に行うために必要な視点を提供し、影響を極小にするための方法を講義する。グローバルな企業経営において直面するビジネスリスク、市場リスク、信用リスクなどの多様なリスクに対応するための様々な視点を提供する。

授業計画

第1回	グローバル企業のリスク
第2回	現代のグローバルアジェンダ
第3回	グローバルリスク 1
第4回	グローバルリスク 2
第5回	グローバルリスク 3
第6回	リスクの根幹はどこにあるか
第7回	グローバルリスクのまとめ
第8回	リスクの原因の解決 1
第9回	リスクの原因の解決 2
第10回	リスクの原因の解決 3
第11回	様々な意見の紹介 1
第12回	様々な意見の紹介 2
第13回	国民国家とグローバル化
第14回	全体総括
第15回	学生プレゼンと論点整理

到達目標

修士課程でのリスク管理の講義での知識を基に、企業経営上のリスクに対する高い関心や感度を養成する。

履修上の注意及び予習・復習

修士課程でのリスクマネジメントの知識を基にし議論を進めることから、金融リスクの基本的知識は前提とする。

評価方法

講義での発言による講義編貢献度とレポート（A4 10枚以下）により評価。レポートは、仮説の適切性、議論の論理性、構成、結果の説得力の軸で評価する。

テキスト

授業中、適宜指示する。

授業概要

サブプライムローン（2008 年）、エンロン・ワールドコム（2001 年）、アジア通貨危機（1997 年）などで格付けの失敗が世界の経済を混乱させたがドクター・レベルの格付け研究者が少ないため賢明な解決策が提示されていないのが現状である。本授業は信用格付けについての研究者を育成することを目的とする。格付けの理論（格付けの役割・リスクとリターンの対応関係など）、格付けの歴史および制度（発祥地アメリカおよび世界への伝播・アメリカおよび日本並びに EU の格付け法体系など）、格付け情報の評価（情報の正確性の判定方法など）、格付けの手法（事業債・金融債・金融証券化商品・ソブリン・地方債などの格付け分析手法）などについて学び、信用格付けについての理論的・実務的体系を理解することを目的に講義を行う。また格付けを研究テーマとしていない学生も世界の金融・資本市場の中で格付けがどのような役割を果たしているかについて学ぶことができる講義体系となっている。

授業計画

第 1 回	講義についてのオリエンテーション
第 2 回	格付け概論（歴史的トピックスなどを例示して信用格付けについての理解を深める）
第 3 回	格付けの理論（1）金融・資本市場における格付けの役割
第 4 回	格付けの理論（2）信用リスクとリターンの関係（効率的資本市場における格付けのコンセプト）
第 5 回	格付けの歴史及び制度（1）アメリカにおける格付けの発祥と世界への伝播
第 6 回	格付けの歴史及び制度（2）サブプライム問題とアメリカ・日本・EU の格付け制度改革
第 7 回	格付け情報の評価：未来情報の評価の考え方・累積デフォルト率などによる格付け情報評価
第 8 回	格付けの分析手法（1）事業債・預金・保険・大学・医療機関などの格付け手法
第 9 回	格付けの分析手法（2）金融証券化商品・ソブリン国債・地方債の格付け手法
第 10 回	モデルによる模擬格付け手法（1）事業債格付けモデル
第 11 回	モデルによる模擬格付け手法（2）ソブリン国債格付けモデル
第 12 回	モデルによる模擬格付け手法（3）銀行・その他の金融機関格付けモデル
第 13 回	モデルによる模擬格付け手法（4）証券化商品の格付けモデル
第 14 回	質疑応答（1）先行研究に関連する質疑応答
第 15 回	質疑応答（2）格付けに関連する研究テーマについての質疑応答
第 16 回	期末試験（レポート作成）

到達目標

- ① 格付けの理論・役割・実務等について深みのある理解を得る。
- ② 模擬格付け等を通じて実際の格付けに近い信用リスク分析を体験する。

履修上の注意及び予習・復習

- ① 企業の有価証券報告書や業績報告書の分析などに興味のある学生が望ましい。
- ② IMF・世界銀行などが公表するカントリー分析および統計について興味があること。

評価方法

- ① 授業における平常点
- ② 授業内・期末作成レポート・報告・質疑応答などによる評価

テキスト

- ① 黒沢義孝『格付け講義』文眞堂
- ② その他参考文献については授業時に指示する

授業概要

（1～8回）仕組みを講じた金融商品（ストラクチャードファイナンス商品）の実例と発展過程ならびに格付会社による格付手法について講義する。証券化商品、仕組み債を含む、ストラクチャードファイナンスの理論と実態ならびに格付会社による格付手法について、実例を踏まえながら、講義する。講義の中で今後研究を深める余地のある分野の特定および考えられ得る政策提言について触れる。

（9～15回）金融機関の格付け分析手法について、主要項目の概要を講義する。銀行を中心とするが、証券会社、ノンバンクも対象とする。格付けの基本となる経済、産業リスクの評価手法、各金融機関の事業リスク、財務リスクの評価、政府支援の評価、親会社の支援について、また金融機関が発行する様々な債券の格付けと資本性の評価などについて、実例に基づいて考察し、格付け会社間での評価手法の違い、また格付けが金融市場に与える影響についても講義する。授業中、受講学生の研究テーマに対応した研究論文について適宜取り上げ講義する。なお、講義中、受講学生に課題を課して発表してもらうことがある。

授業計画

担当者 江川由紀雄

第1回	ストラクチャードファイナンスの実例
第2回	仕組みとリスク 法的リスク、当事者の役割、トランシェ分けの実例
第3回	リスクの評価手法 代表的な評価手法とその限界
第4回	格付会社による格付手法 商品類型別、格付会社別の傾向
第5回	証券化取引の発展過程 日本を中心に
第6回	金融危機に関連して指摘された問題点とその考察
第7回	先行研究の傾向と論点整理
第8回	今後の発展の方向性 日本の金融システムにおける位置付けの考察

担当者 根本直子

第9回	金融機関の格付け手法。経済リスク、産業リスクの評価
第10回	ソブリン格付けと金融機関格付けの関係。政府支援の考え方
第11回	銀行の事業リスク評価。コーポレートガバナンス、会計制度
第12回	銀行の財務リスク評価。自己資本と資産の質、収益性と資金調達、流動性
第13回	銀行の発行する債券の評価。親会社の支援について
第14回	証券会社、ノンバンクの信用力評価の手法
第15回	格付け会社の手法の違い、格付けが銀行や資本市場に与える影響

到達目標

格付けの規準、意味について正確な理解と批判力を持つ。
格付け規準や分析手法を学ぶことで、自己の分析力を広げる。

履修上の注意及び予習・復習

日本国内における実例を踏まえた内容とするが、参考資料として利用する文献には英文によるものも含まれるため、ある程度の英文読解力が期待される。履修者には、積極的な質問および対話を求める。

評価方法

（江川）平常評価（60%）、課題設定と提出レポート（40%）

（根本）平常評価（60%）、課題設定と提出レポート（40%）

前半・後半の成績を総合的に判定する。

テキスト

（江川）

授業の過程で適宜指示する。参考文献：江川 由紀雄『サブプライム問題の教訓—証券化と格付けの精神』（商事法務）

（根本）

授業で適時提示する。

参考文献：根本直子著「残る銀行、沈む銀行—金融危機後の構図」 東洋経済新報社

授業概要

信用リスク分析に対する基本的な心がけ、信用リスクを忠実に捉えるための分析フレームワーク、格付評価の理論と実務（特に信用リスク評価の精度を大きく左右する定性分析に重点を置く）、格付会社・格付けの本質と限界について考察する。また、信用リスク分析を通して企業・産業・経済の実態を客観的に検証できる目を養うことを目指す。さらに、ソブリン格付けに関する専門的な知識・技能を習得することをはじめとして、昨今の金融市場におけるソブリン債問題とその格付け動向等を踏まえてソブリン債格付けの本質・性格について講義する。ケース・スタディも取り上げ、より現実の金融市場におけるソブリン債の格付けの本質を、実践に即して講義する。

授業計画

第1回	ガイダンス
第2回	総論～格付けの本質と限界（1）
第3回	総論～格付けの本質と限界（2）
第4回	信用リスク分析の基本的概念とフレームワーク（1）
第5回	信用リスク分析の基本的概念とフレームワーク（2）
第6回	マクロ環境・業界分析
第7回	個別企業の定性分析（1）
第8回	個別企業の定性分析（2）
第9回	個別企業の定量分析
第10回	個別企業の流動性分析とその他の分析
第11回	個別債務のリスク分析
第12回	信用リスクの比較評価
第13回	ソブリンシーリングを考える
第14回	ソブリン信用分析の基礎
第15回	ソブリンのデフォルトから学ぶ
第16回	まとめ日本ソブリンのクレジットの行方

到達目標

信用リスク分析を通して企業・産業・経済の実態を客観的に検証できる目を養うことを目指す。
財務諸表基礎分析能力を養成する。

履修上の注意及び予習・復習

上記の進行を予定しているが、講師の都合によって変更される場合があるので、毎回の授業においてスケジュールを確認しておくこと。

評価方法

（森田）出席および授業参加度（80%）
提出レポート（20%）

テキスト

（森田）

参考テキスト 森田隆大（2010）「格付けの深層」日本経済新聞出版社
山内直樹・森田隆大（2010）『信用リスク分析—総論』金融財政事情研究会
江夏あかね『日本の復興と財政再建への道』学文社

授業概要

博士論文の作成のための方法論、基本知識を習得する。このため、以下を指導する。

- ① 論文テーマの問題設定の明確化とテーマの絞り込み。
- ② テーマの問題設定のための広範囲な関連文献収集とその理解。
- ③ 論文の作成についての先行研究の論点の整理。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	受講学生の問題意識の確認	第1回	博士論文の方法論の提起
第2回	大まかな論文テーマ分野の現状分析	第2回	博士論文の構成の作成
第3回	テーマに関連した基本文献収集	第3回	論文構成のための文献整理と収集
第4回	基本的な基本研究文献の報告	第4回	文献の考察と報告
第5回	基本的な基本研究文献の報告・討論	第5回	文献の考察と報告・討論
第6回	基本的な基本研究文献の報告・討論	第6回	文献の考察と報告・討論
第7回	基本的な基本研究文献の報告・討論	第7回	文献の考察と報告・討論
第8回	基本的な基本研究文献の報告・討論	第8回	文献の考察と報告・討論、論理構成考察
第9回	論文のテーマの絞り込み	第9回	文献の考察と報告・論理構成考察
第10回	論文テーマの先行研究文献の作成	第10回	研究中間的まとめ
第11回	先行研究文献の報告	第11回	研究中間的まとめ
第12回	先行研究文献の報告・討論	第12回	研究中間的まとめ
第13回	先行研究文献の報告・討論	第13回	研究中間的まとめ
第14回	先行研究文献の報告・討論	第14回	研究中間的まとめ
第15回	先行研究文献の報告・討論	第15回	研究中間的まとめ

到達目標

問題意識の明確化による先行研究文献を読了し、論文テーマを絞り込み、論文の構成（論理展開）を作成する

履修上の注意

自ら課題に対して問題内容の明確化に努め、研究文献に対する批判力を養うこと。

評価方法

授業による報告と研究の進捗状況の総合評価。

テキスト

学生のテーマに即して適宜指示する。

授業概要

博士論文の作成のための基礎知識、及び方法論を習得する。そのため次のような指導を行なう。

1. 論文テーマにおける問題の設定を明確化し、研究テーマを絞り込む。
2. 論文テーマの問題の設定のための関連文献、先行研究の調査・収集とその分析を行なう。
3. 博士論文の作成についての先行研究の主要な論点を整理する。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	受講院生の問題意識の確認	第1回	博士論文の方法論についての指導
第2回	論文の大まかなテーマに関する現状	第2回	博士論文の編別構成
第3回	論文テーマに関連する基本文献調査	第3回	論文作成のための文献整理と収集
第4回	基本文献の報告	第4回	文献の検討と報告
第5回	同上	第5回	同上
第6回	同上	第6回	同上
第7回	同上	第7回	同上
第8回	同上	第8回	同上
第9回	論文テーマの絞り込み	第9回	同上
第10回	先行研究の文献リストの作成	第10回	研究の中間的なまとめ
第11回	先行研究の報告	第11回	同上
第12回	同上	第12回	同上
第13回	同上	第13回	同上
第14回	同上	第14回	同上
第15回	同上	第15回	同上
第16回	研究報告と論点整理	第16回	研究成果の報告

到達目標

問題意識を明確化することにより先行研究を検討し、論文のテーマを絞り込んで、論文の編別構成を作成する。

履修上の注意及

自ら課題に対して問題およびその内容を明確にし、先行研究に対する批判的検討ができるようになること。

評価方法

講義における報告と研究の進展により総合的に評価する。

テキスト

院生の研究テーマにそくして適宜指示する。

授業概要

博士論文を完成させるための準備を進める。特に次のような指導する。

- 1 論文テーマの設定（基本的には本人の研究計画書による）の明確化。
- 2 テーマの問題設定のための既存研究のサーベイと論点整理。
- 3 論点ごとの研究報告。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	受講生の問題意識の把握	第1回	博士論文の構成の作成(1)
第2回	テーマ関連の文献リストの作成	第2回	博士論文の構成の作成(2)
第3回	基本的な文献の調査と報告(1)	第3回	博士論文の構成の作成(3)
第4回	基本的な文献の調査と報告(2)	第4回	論文構成に必要な文献研究のレビュー(1)
第5回	基本的な文献の調査と報告(3)	第5回	論文構成に必要な文献研究のレビュー(2)
第6回	基本的な文献の調査と報告(4)	第6回	論文構成に必要な文献研究のレビュー(3)
第7回	基本的な文献の調査と報告(5)	第7回	論文構成に必要な文献研究のレビュー(4)
第8回	論文テーマの絞り込み	第8回	論文構成に必要な文献研究のレビュー(5)
第9回	テーマ関連の報告と検討(1)	第9回	研究の中間的なとりまとめ(1)
第10回	テーマ関連の報告と検討(2)	第10回	研究の中間的なとりまとめ(2)
第11回	テーマ関連の報告と検討(3)	第11回	研究の中間的なとりまとめ(3)
第12回	テーマ関連の報告と検討(4)	第12回	研究の中間的なとりまとめ(4)
第13回	テーマ関連の報告と検討(5)	第13回	研究の中間的なとりまとめ(5)
第14回	テーマ関連の報告と検討(6)	第14回	研究の中間的なとりまとめ(6)
第15回	研究成果の報告	第15回	研究成果の報告・討論

到達目標

論文作成に関連する先行研究を熟知し、必要な文献を整理する。

博士論文テーマの中間的なとりまとめを行う。

履修上の注意

自ら課題に対して問題内容の明確化に努め、研究文献に対する批判力を養うこと。

自ら積極的に課題を設定し調査研究を行うこと。

評価方法

レポート報告（60%）、講義中の議論（40%）によって総合的に判定する。

テキスト

学生の研究テーマに応じて指示する。

授業概要

急速に変化、発展するヘルスケアサービスを取り巻く産業に関し理解を深め分析する能力を身に付ける。他の産業に比べたヘルスケアサービス特徴と相違点について理解を深め、どのようなマネジメントが重要であるかについて研究する。望ましい医療・介護経営のあり方について研究し、特に昨今の医薬品や医療機器の役割の重要性、医療安全や臨床研究も含めた質管理のあり方も含め、現状と課題の抽出を行う。また、保健・医療・福祉・介護各分野の連携および連続性によりヘルスケアサービス提供がなされていることを理解する。さらに、ヘルスケアサービスは、基本的には供給側も消費側も人間であるヒューマンサービスが基本であり、人事管理やコミュニケーションも影響要因であることについて研究を発展させる。これらを総合し、自らの関心領域を絞り込み一連の研究を遂行する。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	保健・医療・福祉・介護各分野の特徴	第1回	博士論文テーマの絞りこみ
第2回	ヘルスケアサービス・マネジメント	第2回	博士論文テーマに関するプレゼンテーション
第3回	医療経営・介護経営	第3回	文献検討（1）
第4回	医薬品・医療機器業界	第4回	文献検討（2）
第5回	課題の抽出および関心領域の絞り込み	第5回	文献検討（3）
第6回	文献検討（1）	第6回	文献検討（4）
第7回	文献検討（2）	第7回	研究デザインの検討
第8回	文献検討（3）	第8回	テーマに必要な文献リスト作成
第9回	関心テーマの設定	第9回	文献分析（1）
第10回	研究デザインの検討	第10回	文献分析（2）
第11回	テーマに必要な文献リスト作成	第11回	文献分析（3）
第12回	文献分析（1）	第12回	文献分析（4）
第13回	文献分析（2）	第13回	研究の中間的なとりまとめ
第14回	文献分析（3）	第14回	研究成果の報告
第15回	研究成果報告	第15回	研究成果の見直し
第16回	中間取りまとめ	第16回	まとめ

到達目標

- ・ヘルスケアサービス産業についての現状把握と課題の抽出ができる。
- ・医療経営・介護経営についての理解を深められる。
- ・論文作成のための基本的な知識を習得できる。
- ・論文作成に必要な文献の収集および文献検討ができる。
- ・研究デザインの構築を行う。

履修上の注意

自分の関心あるテーマについての絞り込みができ、また深く考察できるよう、学習内容の振り返りを習慣化して欲しい。

評価方法

課題の抽出および理解力、文献収集・分析能力等を総合的に評価する。

テキスト

受講生の研究テーマに応じて適宜指示する。

授業概要

博士論文作成のために必要となる理論を習得する。その上で、先行研究を収集し先行研究の到達点と残された課題を明確にして、そのなかから自分のもっとも関心のあるテーマを選ぶように指導する。学習の範囲は広く構え、関連分野を多く学習するように指導するが、論文のテーマは明確で絞り込まれたものになるように指導する。研究テーマについて多くの人が関心を共有できるものであるために、研究テーマが学界の研究状況における意味と同時に社会的に持つ意味を常に考えて研究するように指導する。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	受講学生の問題関心の確認	第1回	博士論文の構成の作成
第2回	問題に見合った文献のリストの作成	第2回	同上
第3回	基本的な文献に関する報告	第3回	論文構成に必要な文献の整理
第4回	同上	第4回	文献に関する報告
第5回	同上	第5回	同上
第6回	同上	第6回	同上
第7回	同上	第7回	同上
第8回	論文のテーマの絞り込み	第8回	同上
第9回	テーマに即した文献リストの作成	第9回	同上
第10回	文献に関する報告	第10回	研究の中間的なとりまとめ
第11回	同上	第11回	同上
第12回	同上	第12回	同上
第13回	同上	第13回	同上
第14回	同上	第14回	同上
第15回	同上	第15回	同上
第16回	研究成果の報告	第16回	研究成果の報告

到達目標

論文作成に必要な基本的な文献を収集し、読了すること。
大まかに3分の1程度の完成度をを目指すこと。

履修上の注意

自ら積極的に課題を設定し調査研究を行うこと。

評価方法

授業中の報告と研究の進捗によって評価する。

テキスト

学生の研究テーマに応じて指示する。

授業概要

博士論文作成のための方法論、基本知識を習得する。

- ①論文テーマに関する問題設定とテーマの絞り込み。
- ②基本的な文献収集とその理解。
- ③論文テーマにそった先行研究の論点の整理。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	受講生の問題意識の確認	第1回	博士論文の構成と作成方法
第2回	論文テーマに関しての大まかな検討	第2回	博士論文の構成と作成方法
第3回	論文テーマに関しての基本文献調査	第3回	論文構成に必要な文献の整理
第4回	基本文献の報告	第4回	文献の検討と報告
第5回	同上	第5回	同上
第6回	同上	第6回	同上
第7回	同上	第7回	同上
第8回	同上	第8回	同上
第9回	論文テーマの絞り込み	第9回	研究の中間的なとりまとめ
第10回	先行研究の文献リストの作成	第10回	同上
第11回	先行研究の報告	第11回	同上
第12回	同上	第12回	同上
第13回	同上	第13回	同上
第14回	同上	第14回	同上
第15回	研究報告と論点整理	第15回	研究成果の報告

到達目標

論文作成に必要な論理的な思考能力と、先行研究を踏まえた論点の整理ができる能力などを身につけることを目標とする。

履修上の注意

問題意識のもとに設定する論文テーマに基づいた先行研究などの研究文献を丹念に調べ、学ぶと共に、それに関しての報告ができるようにすること。

評価方法

報告と積極的な議論への参加を総合的に評価する。

テキスト

研究テーマに即して、指示する。

授業概要

博士論文の作成のためには、1 年次の時点で明確なテーマの設定とその分析のための方法論を定めて、基本的文献や資料・データを収集するための作業を開始できていること(とりわけ前者)が不可欠である。したがって、各自がどのようなテーマを選ぶのか、そのテーマの研究上の意義は何か、そのテーマを追求するための方法論としてどのような選択肢があるのか等を中心に議論し、博士論文作成のための基礎作りをおこなう。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	はじめに	第1回	先行研究の収集と検討
第2回	これまでに蓄積された研究の報告	第2回	先行研究の収集と検討
第3回	これまでに蓄積された研究の報告	第3回	先行研究の収集と検討
第4回	これまでに蓄積された研究の報告	第4回	先行研究の収集と検討
第5回	テーマの設定のための検討	第5回	先行研究の収集と検討
第6回	テーマの設定のための検討	第6回	分析の方法論の明確化のための検討
第7回	テーマの設定のための検討	第7回	分析の方法論の明確化のための検討
第8回	テーマの分析のための方法論の検討	第8回	分析の方法論の明確化のための検討
第9回	テーマの分析のための方法論の検討	第9回	分析の方法論の明確化のための検討
第10回	テーマの分析のための方法論の検討	第10回	分析の方法論の明確化のための検討
第11回	テーマの分析のための方法論の検討	第11回	分析の方法論の明確化のための検討
第12回	テーマの分析のための方法論の検討	第12回	分析の方法論の明確化のための検討
第13回	テーマの分析のための方法論の検討	第13回	分析の方法論の明確化のための検討
第14回	テーマの分析のための方法論の検討	第14回	分析の方法論の明確化のための検討
第15回	前半の研究成果の報告	第15回	まとめ

到達目標

テーマ設定と方法論明確化に必要な先行研究のフォロー。
テーマ設定と方法論の明確化。

履修上の注意

現実感覚を大切に研究を心がけること。

評価方法

授業中の報告と研究の進度によって評価する。

テキスト

受講生の研究テーマに応じて指示する。

授業概要

博士論文を完成するための準備作業を行う

- (1) 受講生の問題意識の明確化と論文テーマの設定
- (2) 史・資料、基本文献、統計データのリストアップ
- (3) 当該領域の先行研究の検討と論点の整理
- (4) 主要基本文献の精読と報告
- (5) 以上に基づいて、論文の構成案を作成する

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	受講生の問題意識の確認、意見交換	第1回	新しい研究成果の確認、文献リストの補強
第2回	同上	第2回	文献の再検討
第3回	テーマの設定	第3回	史・資料の精読と報告
第4回	史・資料、基本文献の調査とリストの作成	第4回	同上
第5回	同上	第5回	同上
第6回	同上	第6回	同上
第7回	同上	第7回	同上
第8回	基本文献の精読と報告：主要論点の確認	第8回	同上
第9回	同上	第9回	同上
第10回	同上	第10回	同上
第11回	同上	第11回	同上
第12回	同上	第12回	論文の構成案の作成、討議
第13回	同上	第13回	同上
第14回	論点の整理と確認	第14回	論文の構成案の修正
第15回	同上	第15回	同上

到達目標

- ①基本的な文献資料は概ね精読し、理解する。
- ②自らの研究と先行研究との論点の違いを正確に把握する。
- ③論文の構成案を作成する。

履修上の注意

必要な基礎知識、調査スキルを十分に習得しておくこと。
指導教官に過度に依存せず、能動的・意欲的に課題に取り組むこと。

評価方法

論文への取組み状況と課題の完成度

テキスト

テキストは使用しない。進捗状況に応じてリストにある文献を指示または推奨する。

授業概要

論文のテーマを設定し、研究方法について考察し、先行研究について分析するための指導をする。
そのために、受講者による発表と教員との議論を厳密に行う。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	ガイダンス	第1回	論文の各章の報告
第2回	論文の研究テーマの報告	第2回	論文の各章の報告
第3回	論文の研究テーマの報告	第3回	論文の各章の報告
第4回	論文の研究テーマの報告	第4回	論文の各章の報告
第5回	論文の研究テーマの報告	第5回	論文の各章の報告
第6回	論文の研究テーマの設定	第6回	論文の各章の報告
第7回	研究アプローチに関する指導	第7回	論文の再検討
第8回	研究アプローチに関する指導	第8回	論文の再検討
第9回	論文テーマに基づく先行研究分析	第9回	論文の再検討
第10回	論文テーマに基づく先行研究分析	第10回	論文の再検討
第11回	論文テーマに基づく先行研究分析	第11回	論文の再検討
第12回	論文テーマに基づく先行研究分析	第12回	論文の修正
第13回	論文の構成	第13回	論文の修正
第14回	論文の構成	第14回	論文の報告
第15回	論文の報告	第15回	論文の報告

到達目標

博士論文執筆のための基本文献の収集と分析、研究方法についての理解、博士論文テーマの方向性の設定

履修上の注意

綿密な文献分析を求める。

評価方法

先行研究と研究方法についての理解度と研究テーマの独創性

テキスト

指定しない

授業概要

後期課程における研究指導は、博士論文の作成の指導を行うことがメインとなる。履修者は、早期に自己の研究テーマを租税法の広い分野の中から選定し、博士論文作成に向けた研究を開始しなければならない。テーマは修士論文を発展させるものが望ましいが、これとは別に新たに設定することも可能である。授業はゼミナール形式で行うこととし、履修者各人の個別研究発表を主体とする。受講者には各テーマに応じた基本文献や重要判決例を提示するが、自らこれまでの租税法研究者の先行研究を徹底的にリサーチすることが望まれる。この他、隣接分野の研究、さらに英語又はドイツ語の勉強を重ねることも重要である。

なお、3年間で博士論文を書き上げるために、1年次において2本程度の個別研究論文を書き上げることを目標とする。

授業計画

第1回	受講生の研究テーマの確認	第17回	博士論文の目次の作成
第2回	文献リスト作成	第18回	研究成果の報告
第3回	仮目次の作成	第19回	同上
第4回	先行研究の報告	第20回	同上
第5回	同上	第21回	同上
第6回	同上	第22回	同上
第7回	同上	第23回	同上
第8回	研究テーマの絞り込み	第24回	中間とりまとめ
第9回	研究テーマに関する文献リスト作成	第25回	研究成果の報告
第10回	研究成果の報告	第26回	同上
第11回	同上	第27回	同上
第12回	同上	第28回	同上
第13回	同上	第29回	同上
第14回	同上	第30回	同上
第15回	学術論文の報告と指導（1）	第31回	学術論文の報告と指導（3）
第16回	学術論文の報告と指導（2）	第32回	学術論文の報告と指導（4）

到達目標

- ・20,000字程度の学術論文を2本執筆すること。

履修上の注意

- ・文献の積極的な収集と読み込みを行うこと。
- ・毎回研究の進行状況を適切に報告するとともに、指示に従うこと。

評価方法

- ・授業中の報告と研究の進度によって評価する。

テキスト

- ・研究テーマにより適宜指示する。

授業概要

マーケティング研究のテーマは、歴史研究、理論研究、現状分析研究など多岐にわたるが、それらの研究は日本でのみ行われているわけではなく、北米、欧州においてきわめて活発に行なわれ、また近年はアジア諸国での研究も盛んである。このため「日本語による文献」や「日本語による研究」という狭い枠にとらわれていると、世界で自由闊達に展開されている新たな発想を摂取することはできない。わが国学会の研究水準は一般に高いものがあるが、わが国でのみ通用するいわば「ガラパゴス化」した「精緻な議論」を日本語のみで展開して「自己満足」してしまうことは、学術的に不幸なことである。こうした隘路を打開するためには、英文文献の探索を行なうだけでなく、英語圏の学会（もちろん他の言語でもよい）に適宜参加し、その理論と分析視角を磨くことが必要である。日本の事例を分析する場合であっても、日本の研究は海外でも行われており、また海外の学術的オーディエンスは日本の研究を知りたがっていることを肝に銘じるべきである。博士論文は通常日本語で書かれるが、内容的には国際的に通用力のある論文に仕上げるのが求められ、この特別研究指導 I ではその基礎固めが行なえるよう指導する。

授業計画

＜前期＞		＜後期＞	
第1回	前期へのガイダンス	第1回	後期へのガイダンス
第2回	研究テーマ設定に関する討論	第2回	分析視角とすべき基礎理論への反対説の検討
第3回	文献探索に関する指導	第3回	分析視角とすべき基礎理論への反対説の検討
第4回	学術論文の技法に関する指導	第4回	分析視角とすべき基礎理論への反対説の検討
第5回	分析視角となりうる国内外の理論の探索	第5回	分析視角とすべき基礎理論への反対説の検討
第6回	分析視角となりうる国内外の理論の探索	第6回	分析視角とすべき基礎理論への反対説の検討
第7回	分析視角となりうる国内外の理論の探索	第7回	博士論文分析視角の形成とその暫定稿の執筆
第8回	分析視角とすべき先行研究リストの作成	第8回	博士論文分析視角の形成とその暫定稿の執筆
第9回	分析視角とすべき先行研究リストの作成	第9回	博士論文分析視角の形成とその暫定稿の執筆
第10回	分析視角とすべき先行研究リストの作成	第10回	博士論文分析視角の形成とその暫定稿の執筆
第11回	分析視角とすべき理論の基本文献の検討	第11回	博士論文分析視角の形成とその暫定稿の執筆
第12回	分析視角とすべき理論の基本文献の検討	第12回	博士論文分析視角の再検討
第13回	分析視角とすべき理論の基本文献の検討	第13回	博士論文分析視角の再検討
第14回	分析視角とすべき理論の基本文献の検討	第14回	博士論文の章別構成第1次案の報告と討論
第15回	分析視角とすべき理論の基本文献の検討	第15回	博士論文の章別構成第1次案の報告と討論

到達目標

①博士論文のテーマを設定し、②国内外学会の新動向の探索を通じ博士論文の分析視角を確立する。

履修上の注意

日本語の文献探索だけでなく、英語（他の言語でもよい）による資料・文献探索は必須である。翻訳のある著作であっても、邦訳から引用して事足りりとするのではなく、直接原文にあたり、原文から自らの訳で引用することが望ましい。

評価方法

研究テーマの設定とその分析視角の確立、そのために費やされた労力によって評価する。

テキスト

＜参考図書＞薄井和夫『実践としてのマーケティング』研究と実践コミュニティ — 『実践論的転回』によせて — 中央大学『商学論纂』第54巻第5号、2013年、165～205ページ。

授業概要

博士論文作成のための学術論文の報告に向けて研究指導する。このため以下を指導する。

- ① 論文テーマの問題内容（論点）の一層の明確化をする。
- ② テーマの問題意識、先行研究の内容・方法と自己の研究内容・方法の違いの明確化。
- ③ 論文発表のための参考文献・先行研究論文の整理を行う。関連学会で研究報告する。
- ④ 論文作成技法を育成する。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	学術論文としてのテーマの明確化	第1回	論文の作成・報告・討論
第2回	学術論文の論理展開（論文構成）作成	第2回	論文の作成・報告・討論
第3回	論文構成に即して研究報告	第3回	論文の作成・報告・討論
第4回	論文構成に即して研究報告・討論	第4回	論文の作成・報告・討論
第5回	論文構成に即して研究報告・討論	第5回	論文の作成・報告・討論
第6回	論文構成に即して研究報告・討論	第6回	論文の作成・報告・討論
第7回	論文構成に即して研究報告・討論	第7回	論文の作成・報告・討論
第8回	論文構成に即して研究報告・討論	第8回	研究報告
第9回	論文構成に即して研究報告・討論	第9回	論文の構成・検討・修正
第10回	論文構成に即して研究報告・討論	第10回	論文の作成・報告
第11回	先行研究と自己の研究の再考究	第11回	論文の作成・報告
第12回	必要な文献・調査ヒアリング補強	第12回	論文の作成・報告
第13回	必要文献・調査ヒアリング補強の報告	第13回	論文の作成・報告
第14回	必要文献・調査ヒアリング補強の報告	第14回	論文の作成・報告
第15回	必要文献・調査ヒアリング補強の報告	第15回	論文の作成・報告
第16回	研究報告	第16回	学術論文として草稿提出

到達目標

博士論文の学術草稿論文提出。自己の論文のオリジナリティの明確化。

履修上の注意

自ら批判的に学術論文を考究する。

評価方法

作成した学術論文草稿の提出物による。

テキスト

学生のテーマに即して適宜指示する。

授業概要

博士論文の作成のための学術論文の報告に向け研究指導を行なう。そのため次の指導を行なう。

1. 論文テーマの問題設定と論点をさらに明確にする。
2. 先行研究の批判的検討を行なう力量をつける。
3. 論文発表のための参考文献と先行研究の整理を行なう。
4. 論文作成の技法についての能力を高める。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	学術論文としてのテーマの明確化	第1回	論文の作成・報告
第2回	論文の編別構成の作成	第2回	同上
第3回	論文の構成に応じた報告	第3回	同上
第4回	同上	第4回	同上
第5回	同上	第5回	同上
第6回	同上	第6回	同上
第7回	同上	第7回	同上
第8回	同上	第8回	研究発表
第9回	同上	第9回	論文の修正
第10回	同上	第10回	論文の作成と報告
第11回	先行研究の検討	第11回	同上
第12回	必要文献と調査の補強の報告	第12回	同上
第13回	同上	第13回	同上
第14回	同上	第14回	同上
第15回	同上	第15回	同上
第16回	研究発表	第16回	博士論文第一回草稿の提出

到達目標

- ・博士論文の第一回草稿の提出。
- ・論文のオリジナリティの明確化。

履修上の注意及び予習・復習

自ら批判的に学術論文を考察する。

評価方法

研究発表の内容及び学術論文を評価する。

テキスト

院生のテーマにそって適宜指示する。

授業概要

研究の進捗状況を踏まえて、博士論文の前提となる学術論文（最終論文の一部を構成する論文）を公刊誌に掲載発表するための 研究指導を行う。論文テーマの再吟味（適切性など）、理論の整合性の検討、文献サーベイあるいは実証分析の妥当性などを精査する。また、学会やワークショップに参加し、研究成果を発信していく。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	学術論文テーマの明確化	第17回	論文の作成・報告・討論(1)
第2回	テーマ関連の文献収集	第18回	論文の作成・報告・討論(2)
第3回	主要な論点毎の小論文の作成(1)	第19回	論文の作成・報告・討論(3)
第4回	主要な論点毎の小論文の作成(2)	第20回	論文の作成・報告・討論(4)
第5回	主要な論点毎の小論文の作成(3)	第21回	論文の作成・報告・討論(5)
第6回	主要な論点毎の小論文の作成(4)	第22回	論文の作成・報告・討論(6)
第7回	主要な論点毎の小論文の作成(5)	第23回	論文の作成・報告・討論(7)
第8回	主要な論点毎の小論文の作成(6)	第24回	研究報告
第9回	主要な論点毎の小論文の作成(7)	第25回	論文の構成・検討・修正(1)
第10回	主要な論点毎の小論文の作成(8)	第26回	論文の構成・検討・修正(2)
第11回	研究の見直し	第27回	見直し後の論文の作成・報告(1)
第12回	文献報告(1)	第28回	見直し後の論文の作成・報告(2)
第13回	文献報告(2)	第29回	見直し後の論文の作成・報告(3)
第14回	文献報告(3)	第30回	見直し後の論文の作成・報告(4)
第15回	部研報告(4)	第31回	見直し後の論文の作成・報告(5)
第16回	研究成果の報告	第32回	研究成果の報告

到達目標

- ・博士論文提出の前提となる学術論文の提出。
- ・論文のオリジナリティの明確化。

履修上の注意

論文作成の進捗ごとに緻密な研究指導を受けること。

評価方法

- ・自立した研究者としての自覚を持つこと。

テキスト

学生の研究テーマに応じて指示する。

授業概要

I で学んだヘルスケアサービスを取り巻く市場について理解を深める。ヘルスケアコンシューマー行動に影響を及ぼす因子、満足度を規定する要因、情報の公開によるコンシューマーおよびヘルスケアサービス提供機関双方に与える影響、消費者のエンパワメントに必要な要素、意思決定支援について多面的に指導する。保険システムや診療報酬制度などのヘルスケアシステムについても理解を深め、診療機能や規模なども考慮に入れ、ベスト・プラクティスを目指すためのマネジメントについて研究指導する。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	ヘルスケアサービス市場の理解	第1回	文献報告
第2回	ヘルスケアコンシューマー行動の理解	第2回	同上
第3回	これまでの学習の整理と研究内容の見直し	第3回	論文作成・報告
第4回	学術論文テーマの明確化	第4回	同上
第5回	学術論文の構成（目次）の作成	第5回	同上
第6回	構成に基づく研究報告	第6回	同上
第7回	研究報告 1	第7回	同上
第8回	研究報告 2	第8回	同上
第9回	研究報告 3	第9回	研究見直し
第10回	研究報告 4	第10回	論文作成・報告
第11回	研究報告 5	第11回	同上
第12回	ヘルスケアシステムの理解	第12回	同上
第13回	ベスト・プラクティスの理解	第13回	同上
第14回	研究の見直し	第14回	同上
第15回	オリジナリティーについての検討	第15回	同上
第16回	必要文献の補強	第16回	学術論文提出

到達目標

- ・学術論文が作成できる。
- ・論文のオリジナリティーを明確にすることができる。

履修上の注意

自らがもっとも関心のあるテーマについて、学術論文としてまとめあげられるようしっかりと研究指導を受けることを求める。

評価方法

作成した学術論文を総合的に評価する。

テキスト

受講生の研究テーマに応じて適宜指示する。

授業概要

学術論文の作成と発表を目標として指導を行う。この論文は博士論文の前提となる論文なので、この論文の深化・拡充したものが博士論文となることを前提として作成する。先行研究の到達点と問題点を検討し明確にする。このプロセスを経て、自分の問題関心を絞り込み、それまでの研究の進展を踏まえて論文作成可能なテーマを立て、論文を作成する。論文の構成の妥当性、推論の合理性、結論の意味を明確になるように指導する。また、論文作成上の必要なルールを身につけるように指導する。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	学術論文のテーマを明確にする	第1回	論文の作成・報告
第2回	学術論文の構成（目次）の作成	第2回	同上
第3回	構成に即して順次研究報告	第3回	同上
第4回	同上	第4回	同上
第5回	同上	第5回	同上
第6回	同上	第6回	同上
第7回	同上	第7回	同上
第8回	同上	第8回	研究報告
第9回	同上	第9回	研究の見直し
第10回	同上	第10回	論文作成・報告
第11回	研究の見直し	第11回	同上
第12回	必要文献の補強	第12回	同上
第13回	文献報告	第13回	同上
第14回	同上	第14回	同上
第15回	同上	第15回	同上
第16回	研究報告	第16回	学術論文提出

到達目標

- ・博士論文提出の前提となる学術論文の提出。
- ・関連文献の理解。
- ・論文のオリジナリティの明確化。

履修上の注意

自ら考え、工夫し、判断して研究を進め、研究指導を受けること。

評価方法

作成した学術論文による。

テキスト

学生のテーマに応じて適宜指示する。

授業概要

学術論文の作成と発表を指導する。この学術論文は、博士論文を提出する前提であるだけでなく、博士論文を構成する重要な論点の一つである。このため、論点の明確化は言うに及ばず、先行研究との関係性を論じることができるように研鑽する必要がある。また、論文構成の妥当性、合理性、そして新規性を意識した研究ができるように指導する。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	学術論文のテーマを明確にする	第1回	論文の作成と報告
第2回	学術論文の構成の作成	第2回	同上
第3回	構成に即しての研究報告	第3回	同上
第4回	同上	第4回	同上
第5回	同上	第5回	同上
第6回	同上	第6回	同上
第7回	同上	第7回	研究の見直し
第8回	同上	第8回	論文の作成と報告
第9回	同上	第9回	同上
第10回	研究の見直し	第10回	同上
第11回	研究の報告	第11回	同上
第12回	同上	第12回	同上
第13回	同上	第13回	同上
第14回	同上	第14回	学術論文の報告と指導
第15回	研究成果の報告	第15回	学術論文の報告と指導

到達目標

論文作成に必要な論理的な思考能力と、先行研究を踏まえた論点の整理ができる能力などを身につけること。さらに、論文内容が独自性と新規性を備えるために必要な思考能力も身につけることを目標とする。

履修上の注意

学術論文を作成するための研鑽と報告をすること。

評価方法

作成した学術論文により評価する。

テキスト

研究テーマに即して、適宜指示する。

授業概要

1年次に確立したテーマ設定と方法論は一般には抽象的にとどまる場合が多い。したがって2年次にはこれを具体化して博士論文にまで結びつけるための作業をおこなう。そのためには、実際に論文を書いて、他人の言葉ではなく自分の言葉で表現することが大切である。会話だけでなく、原稿をベースとした検討をおこなう。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	はじめに	第1回	はじめに
第2回	博士論文の章別構成の提示	第2回	博士論文の章別構成の修正・提示
第3回	必要な資料・データの明確化	第3回	不足している資料・データの明確化
第4回	収集された資料・データの検討	第4回	収集された資料・データの検討
第5回	収集された資料・データの検討	第5回	収集された資料・データの検討
第6回	収集された資料・データの検討	第6回	収集された資料・データの検討
第7回	収集された資料・データの検討	第7回	収集された資料・データの検討
第8回	収集された資料・データの検討	第8回	収集された資料・データの検討
第9回	博士論文原稿の執筆と検討	第9回	博士論文原稿の執筆と検討
第10回	博士論文原稿の執筆と検討	第10回	博士論文原稿の執筆と検討
第11回	博士論文原稿の執筆と検討	第11回	博士論文原稿の執筆と検討
第12回	博士論文原稿の執筆と検討	第12回	博士論文原稿の執筆と検討
第13回	博士論文原稿の執筆と検討	第13回	博士論文原稿の執筆と検討
第14回	博士論文原稿の執筆と検討	第14回	博士論文原稿の執筆と検討
第15回	博士論文原稿の執筆と検討	第15回	博士論文原稿の執筆と検討
第16回	前半の研究成果の報告	第16回	後半の研究成果の報告

到達目標

博士論文の全体像あるいはコンセプトを確立する能力の獲得。
先行研究や資料・データを咀嚼して、自分の言葉で表現できる能力の獲得。

履修上の注意

現実感覚を大切に研究を心がけること。

評価方法

授業中の報告と研究の進捗によって評価する。

テキスト

学生の研究テーマに応じて指示する。

授業概要

初年度に行った史・資料の精読、先行研究への批判的検討の結果に基づき、自らの新しい論点と論文のオリジナリティーを明確化し、年度前半に博士論文の一部となる学術論文の執筆、年度後半に書き上げた論文の全部または完成度の高い部分を学会で発表し、学会誌などに掲載できるように研究指導を行う。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	博士論文の論点とオリジナリティーの明確化	第1回	年度前半の研究内容の振り返り、後半の研究課題の再確認
第2回	同上	第2回	学術論文の作成・報告
第3回	学術論文のテーマ・構成についての検討	第3回	同上
第4回	同上（テーマの適切性、実証の可能性など）	第4回	同上
第5回	構成に即した研究報告	第5回	同上
第6回	同上	第6回	同上
第7回	同上	第7回	同上
第8回	同上	第8回	同上
第9回	同上	第9回	同上
第10回	同上	第10回	報告内容の再検討・見直し
第11回	同上	第11回	同上
第12回	同上	第12回	研究報告
第13回	テーマ、構成の見直し	第13回	研究報告
第14回	史・資料の追加・補強	第14回	学術論文の提出と博士論文第一次稿の完成
第15回	研究報告の問題点の確認	第15回	同上

到達目標

- ①学会報告および執筆論文の学会誌での掲載発表
- ②博士論文第一次稿の完成

履修上の注意

- ①学会報告、学術論文の掲載発表を必ず達成するよう最大限に努力すること。
- ②指導教官の指示に従いながら、能動的・意欲的に研究課題に取り組むこと。

評価方法

報告内容、作成した学術論文の内容によって評価する。

テキスト

文献は必要に応じてその都度指示する。

授業概要

博士論文のテーマの再確認・論文の構成の検討・各章の吟味、等々を行う。
 研究アプローチ・先行文献の分析の妥当性を検討する。
 妥当な研究テーマを設定し、論文の全体像を提示することができるよう指導する。

授業計画

＜前期＞		＜後期＞	
第1回	研究テーマの確認	第1回	論文の前半部分の報告
第2回	研究の方向性の検討	第2回	論文の前半部分の報告
第3回	研究の進捗および予定の確認	第3回	論文の前半部分の報告
第4回	研究テーマの報告	第4回	論文の前半部分の報告
第5回	研究テーマの報告	第5回	論文の前半部分の報告
第6回	先行研究の分析・報告	第6回	論文の前半部分の報告
第7回	先行研究の分析・報告	第7回	論文の後半部分の報告
第8回	先行研究の分析・報告	第8回	論文の後半部分の報告
第9回	論文構成の検討	第9回	論文の後半部分の報告
第10回	論文構成の検討	第10回	論文の後半部分の報告
第11回	論文構成の検討	第11回	論文の後半部分の報告
第12回	序論部分の報告	第12回	論文の後半部分の報告
第13回	序論部分の報告	第13回	論文の全体を報告
第14回	序論部分の報告	第14回	論文の全体を報告
第15回	前期の総括	第15回	論文の全体を報告

到達目標

妥当な研究テーマを設定し、論文の構成を検討し、論文の全体像をまとめ上げる。

履修上の注意

論文執筆のために先行文献を徹底して分析し、議論し、検討することを求める。

評価方法

論文の進捗状況と研究姿勢

テキスト

適宜指示する

授業概要

「租税法研究指導Ⅰ」を踏まえて研究指導を行う。租税法研究指導Ⅱにおいては、自己の博士論文テーマについての問題意識を深め、また独自の論点を提示できるように研鑽することが求められる。さらに、租税法研究関連の学会やセミナー等で報告できるレベルの研究成果に対応した研究指導を行う。博士論文は、このような成果の積み重ねの結果として仕上がっていくことを認識できるよう指導する。

なお、2年次においても2本程度の個別研究論文を書き上げることを目標とする。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	研究テーマの確認	第1回	研究テーマの確認
第2回	先行研究の報告	第2回	博士論文の目次の確認
第3回	同上	第3回	文献リストの確認
第4回	同上	第4回	先行研究の報告
第5回	同上	第5回	同上
第6回	同上	第6回	同上
第7回	研究内容の報告（適宜見直し）	第7回	同上
第8回	同上	第8回	研究内容の報告（適宜見直し）
第9回	同上	第9回	同上
第10回	同上	第10回	同上
第11回	同上	第11回	同上
第12回	同上	第12回	同上
第13回	同上	第13回	同上
第14回	同上	第14回	同上
第15回	学術論文の報告（1）と指導	第15回	学術論文の報告（3）と指導
第16回	学術論文の報告（2）	第16回	学術論文の報告（4）

到達目標

- ・年間2本の学術論文の執筆

履修上の注意及び予習・復習

- ・毎回、確実に、かつ適切に報告を行うこと。

評価方法

- ・学術論文により評価する。

テキスト

- ・適宜指示する。

授業概要

特別研究指導Ⅱでは、前年の特別研究指導Ⅰを受けて、博士論文の分析視角に関する先行文献サーベイを完了し、実態調査が必要である場合は、実態調査の具体的な設計と調査を行なう。理論的ないし歴史的テーマの場合は、取り上げる対象の分析をさらに進化させる。また、博士論文を構成する成果の一部をわが国学会や海外学会で報告し、国内外での討論という洗礼を受けることを通じて、博士論文の質をより深化したものにす。以上を通じ、年度末までに、博士論文の章別編成をほぼ完成することができるように指導する。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	前期へのガイダンス	第1回	後期へのガイダンス
第2回	博士論文の現段階に関する報告と討論	第2回	実態調査計の遂行結果、理論的・歴史的 분석素材の拡大深化の結果報告
第3回	学術論文の技法に関する確認と指導	第3回	実態調査計の遂行結果、理論的・歴史的 분석素材の拡大深化の結果報告
第4回	分析視角となる国内外の理論のまとめ	第4回	実態調査計の遂行結果、理論的・歴史的 분석素材の拡大深化の結果報告
第5回	分析視角となる国内外の理論のまとめ	第5回	実態調査計の遂行結果、理論的・歴史的 분석素材の拡大深化の結果報告
第6回	分析視角となる国内外の理論のまとめ	第6回	実態調査計の遂行結果、理論的・歴史的 분석素材の拡大深化の結果報告
第7回	分析視角となる国内外の理論のまとめ	第7回	内外学会において博士論文の一部を学術論文として発表することへの指導
第8回	分析視角となる国内外の理論のまとめ	第8回	内外学会において博士論文の一部を学術論文として発表することへの指導
第9回	国内外学会での報告可能性の検討と指導	第9回	内外学会において博士論文の一部を学術論文として発表することへの指導
第10回	国内外学会での報告可能性の検討と指導	第10回	内外学会において博士論文の一部を学術論文として発表することへの指導
第11回	実態調査計画作成または理論的・歴史的 분석素材の拡大深化の探索	第11回	内外学会において博士論文の一部を学術論文として発表することへの指導
第12回	実態調査計画作成または理論的・歴史的 분석素材の拡大深化の探索	第12回	内外学会において博士論文の一部を学術論文として発表することへの指導
第13回	実態調査計画作成または理論的・歴史的 분석素材の拡大深化の探索	第13回	博士論文章別編成の検討
第14回	実態調査計画作成または理論的・歴史的 분석素材の拡大深化の探索	第14回	博士論文章別編成の検討
第15回	実態調査計画作成または理論的・歴史的 분석素材の拡大深化の探索	第15回	博士論文章別編成の確定

到達目標

①博士論文の章別構成の確立。②博士論文の一部を学術論文として刊行。③テーマが実態分析の場合は実態調査の遂行。テーマが理論的・歴史的 연구の場合は、検討の射程範囲の確定。

履修上の注意

わが国学会だけでなく、海外学会での動向をきちんとサーベイすること、および国内外の学会に参加することは、国際的に通用力のある博士論文完成のための必須条件である。

評価方法

博士論文の章別構成の具体性、博士論文の一部をどのように学術論文化できたかどうかを基本とし、そのために費やされた労力によって評価する。

テキスト

<参考図書>

Kazuo Usui, *The Development of Marketing Management: The Case of the USA c.1910–1940*, Aldershot, UK: Ashgate, 2008.

Kazuo Usui, *Marketing and Consumption in Modern Japan*, Abington, UK: Routledge, 2014.

Kazuo Usui, “Japanese retailing”, in Parissa Hagahirian ed., *Routledge Handbook of Japanese Business and Management*, Abington, UK: Routledge, 2014, pp.284–296.

授業概要

2年次に発表した学術論文草稿を基礎に、先行研究の成果等をさらに広く、深く研究し、博士論文としてオリジナリティを十分明確化し、学術論文としての成果あるものとなるよう研究指導する。博士論文を作成し、その分野の自立した研究者となるよう、学会等で発表し、関連学会の学術水準を認識させ、論文の水準向上に一層取り組ませる。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	論文テーマ論点の再検討確認	第1回	論文作成・報告
第2回	論文の研究方法の再確認	第2回	論文作成・報告
第3回	先行研究、調査研究の再確認と補強	第3回	論文作成・報告
第4回	研究報告	第4回	論文作成・報告
第5回	研究報告・討論	第5回	論文作成・報告
第6回	研究報告・討論	第6回	中間報告会資料作成
第7回	研究報告・討論	第7回	中間報告会資料作成
第8回	中間報告会資料作成	第8回	論文作成・報告
第9回	博士論文の目次の確定	第9回	論文作成・報告
第10回	論文作成・報告	第10回	論文作成・報告
第11回	論文作成・報告	第11回	論文作成・報告
第12回	論文作成・報告	第12回	論文作成・報告
第13回	論文作成・報告	第13回	残された課題の整理
第14回	論文作成・報告	第14回	論文の提出
第15回	論文作成・報告	第15回	最終試験準備
第16回	研究のまとめ・補強	第16回	論文作成・報告

到達目標

研究に対して積極的かつ、謙虚な姿勢で取り組み、自らで問題分析できるよう研究指導を受けること。

評価方法

中間報告会の内容及び自立した研究者の研究姿勢を評価する。

テキスト

適宜指示する。

授業概要

2年次に提出した博士論文の第一回草稿を基礎にして、先行研究をさらに詳しく検討し、博士論文としてのオリジナリティを重視し、学術論文として完成度の高いものとするように研究指導する。

博士論文を作成し、当該分野において自立した研究者として研究できるようにする。そのため学会などで報告できるように指導する。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	博士論文のテーマと論点の再確認	第1回	論文の作成と報告
第2回	研究方法の再確認	第2回	同上
第3回	先行研究・調査研究の再確認	第3回	同上
第4回	参考文献などの見直し	第4回	同上
第5回	研究発表	第5回	同上
第6回	同上	第6回	中間報告会の資料の作成
第7回	同上	第7回	同上
第8回	中間報告会の資料の作成	第8回	論文の作成と報告
第9回	博士論文の編別構成の確定	第9回	同上
第10回	論文の作成と報告	第10回	同上
第11回	同上	第11回	同上
第12回	同上	第12回	同上
第13回	同上	第13回	論文の作成
第14回	同上	第14回	残された課題の整理
第15回	同上	第15回	最終試験の準備
第16回	研究のまとめ	第16回	同上

到達目標

博士論文の完成

研究指導なしに、自らテーマを設定し、分析できて、学術論文を作成できる自立した研究者の育成

履修上の注意

研究に対して積極的に、しかも謙虚な姿勢で取り組み、みずからで問題の分析ができるように研究指導を受けること。

評価方法

研究者としての研究姿勢を評価する。

テキスト

適宜指示する。

授業概要

テーマをさらに発展させ、深化させて、博士論文としてオリジナリティを十分明確化し、学術論文としての成果あるものとなるよう研究指導する。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	博士論文のテーマの最終的確定	第17回	論文作成・報告(1)
第2回	既発表論文の補強点の明確化	第18回	論文作成・報告(2)
第3回	必要文献の見直し	第19回	論文作成・報告(3)
第4回	文献報告(1)	第20回	論文作成・報告(4)
第5回	文献報告(2)	第21回	論文作成・報告(5)
第6回	文献報告(3)	第22回	中間報告会資料作成
第7回	中間報告会用資料作成	第23回	中間報告会資料作成
第8回	同上	第24回	論文作成・報告(1)
第9回	論文作成・報告(1)	第25回	論文作成・報告(2)
第10回	論文作成・報告(2)	第26回	論文作成・報告(3)
第11回	論文作成・報告(3)	第27回	論文作成・報告(4)
第12回	論文作成・報告(4)	第28回	論文作成・報告(5)
第13回	論文作成・報告(5)	第29回	論文作成・報告(6)
第14回	論文作成・報告(6)	第30回	論文の提出
第15回	論文作成・報告(7)	第31回	最終試験準備
第16回	研究成果の報告	第32回	最終試験準備

到達目標

- ・博士論文の完成
- ・自立した研究者の育成

履修上の注意

- ・自立した研究者としての自覚を持つこと

評価方法

- ・自立した研究者としての自覚を持つこと

テキスト

学生の研究テーマに応じて指示する。

授業概要

Ⅱまでで学んだ知識をベースに、国際的な視野からヘルスケアサービスの質について学ぶ。ヘルスケアサービスのグローバル化が進むことによる効果、および新たに生じるリスクについても理解を深める。また医療経営に必要なマネジメント能力とはどのようなものかについても総合的に研究指導する。更に、ヘルスケアサービス提供組織は、多職種によるダイバーシティ・マネジメントが求められることについても指導する。第三者評価などヘルスケアサービスの質保証についても理解を深め、質評価の切り口（ストラクチャープロセスアウトカム）および指標について、医療安全も含めて研究指導する。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	国際的視野から見たヘルスケアサービスの理解	第1回	論文最終見直し
第2回	海外文献研究 1	第2回	論文作成・報告
第3回	海外文献研究 2	第3回	同上
第4回	海外文献研究 3	第4回	同上
第5回	博士論文テーマの最終決定	第5回	同上
第6回	既発表論文の見直し	第6回	中間報告会資料作成
第7回	中間報告会用資料作成	第7回	同上
第8回	同上	第8回	論文作成・報告
第9回	博士論文の構成（目次）の確定	第9回	同上
第10回	文献リスト作成指導	第10回	同上
第11回	論文作成・報告	第11回	同上
第12回	同上	第12回	同上
第13回	同上	第13回	同上
第14回	同上	第14回	批判的検討
第15回	同上	第15回	論文の提出
第16回	質評価や安全についての理解	第16回	最終試験準備

到達目標

博士論文を完成させる。
グローバルな視点で研究を遂行する能力を身につける。

履修上の注意

客観的な視点を持つこと、論理的な思考と整理能力を養うよう努力すること。

評価方法

博士論文作成プロセスを通して、論文作成能力を評価する。
研究倫理および研究者としての自立度を評価する。

テキスト

適宜必要に応じて授業内に指示する。

授業概要

2年次に、発表した学術論文を踏まえ、これを敷衍する形で博士論文を作成するように指導する。博士論文の作成際には、研究の成果がアカデミズムにおいて意味をなすものであることがもっとも重要であり、このためには論文が学術的なオリジナリティを持ち、論文の成果が、既存の研究に対して持つ意味が明確になるように指導する。今後自立した研究者として問題関心を明確にして研究を行い学術的に意味のある論文が作成できるように指導する。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	博士論文のテーマの最終的確定	第1回	論文作成・報告
第2回	既発表論文の補強点の明確化	第2回	同上
第3回	必要文献の見直し	第3回	同上
第4回	文献報告	第4回	同上
第5回	同上	第5回	同上
第6回	同上	第6回	中間報告会資料作成
第7回	中間報告会用資料作成	第7回	同上
第8回	同上	第8回	論文作成・報告
第9回	博士論文の構成（目次）の確定	第9回	同上
第10回	論文作成・報告	第10回	同上
第11回	同上	第11回	同上
第12回	同上	第12回	同上
第13回	同上	第13回	論文の提出
第14回	同上	第14回	残された課題の整理
第15回	同上	第15回	最終試験準備
第16回	研究のまとめ	第16回	同上

到達目標

- ・博士論文の作成
- ・研究者としての自立

履修上の注意

研究・論文の問題点を自ら発見し、修正する姿勢で研究指導を受けること。

評価方法

自立した研究者としての研究姿勢を評価する。

テキスト

適宜指示する。

授業概要

2年次に発表した学術論文を踏まえ、博士論文のテーマと論点を再確認すると共に、先行研究の再確認の下での整理を行い、オリジナリティのある論文が作成できるように指導する。また、この博士論文の作成を通じて得た知見を活かしたさらなる研究に踏み出すことができるよう指導する。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	博士論文のテーマと論点の再確認	第1回	論文の作成と報告
第2回	論文の研究方法の再確認	第2回	同上
第3回	先行研究の再確認と補強	第3回	同上
第4回	文献報告	第4回	同上
第5回	同上	第5回	同上
第6回	同上	第6回	中間報告会の資料作成
第7回	中間報告会の資料作成	第7回	同上
第8回	中間報告会の資料作成	第8回	論文作成と報告
第9回	博士論文の構成の確定	第9回	同上
第10回	論文作成と報告	第10回	同上
第11回	同上	第11回	同上
第12回	同上	第12回	博士論文の提出
第13回	同上	第13回	残された課題の整理
第14回	同上	第14回	最終試験の準備
第15回	研究のまとめ	第15回	同上

到達目標

論理的な思考能力の充実と、独自性と新規性を備えている論文を作成する能力だけでなく、次なる研究に広がるような研究能力を身につけることを目標とする。

履修上の注意

論文作成の指導のみに頼るとこなく、自主的な研究の取り組みによる研鑽を積み重ねるという姿勢が求められる。

評価方法

博士論文作成に至までの研究者としての研究姿勢を評価する。

テキスト

適宜指示する。

授業概要

博士論文の完成のための議論を継続する。博士論文としての水準に到達するためには、テーマ設定が明確かつ有意味であり、その分析の方法論が的確であることを前提として、さらにそれを表現する上で的確な章別構成で論じることが必要である。実際に執筆すると、章別構成の見直しが修正はしばしば必要になるだけでなく、さらに遡って方法論の再検討や先行研究の再整理も必要になるのが一般的なケースである。この作業をおこなうためには教員と受講生との間の原稿をベースとした緊密なコミュニケーションが必要であるので、このコミュニケーションを重視した指導をおこなう。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	2年次に執筆された原稿に基づく議論	第1回	博士論文章別構成の見直しと再確認
第2回	2年次に執筆された原稿に基づく議論	第2回	博士論文原稿の執筆と検討
第3回	2年次に執筆された原稿に基づく議論	第3回	博士論文原稿の執筆と検討
第4回	博士論文章別構成の最終確定	第4回	博士論文原稿の執筆と検討
第5回	博士論文原稿の執筆と検討	第5回	博士論文原稿の執筆と検討
第6回	博士論文原稿の執筆と検討	第6回	中間報告会の資料作成
第7回	中間報告会の資料作成	第7回	中間報告会の資料作成
第8回	中間報告会の資料作成	第8回	博士論文原稿の執筆と検討
第9回	中間報告会に基づく再検討、資料収集	第9回	博士論文原稿の執筆と検討
第10回	中間報告会に基づく再検討、資料収集	第10回	博士論文原稿の執筆と検討
第11回	博士論文原稿の執筆と検討	第11回	博士論文原稿の執筆と検討
第12回	博士論文原稿の執筆と検討	第12回	残された課題の整理
第13回	博士論文原稿の執筆と検討	第13回	残された課題の整理
第14回	博士論文原稿の執筆と検討	第14回	論文の完成と提出
第15回	博士論文原稿の執筆と検討	第15回	最終試験準備
第16回	博士論文原稿の執筆と検討	第16回	最終試験準備

到達目標

博士論文の完成

履修上の注意

現実感覚を大切に研究を心がけること。

評価方法

授業中の報告と研究の進度によって評価する。

テキスト

学生の研究テーマに応じて指示する。

授業概要

最終年度において、次のように研究指導を行う。

- ①学会発表時の質疑応答の内容を吟味し、不足する文献資料を補強すると同時に、問題点を解決させる。
- ②博士論文を期限まで確実に完成させるために、年間、月間、週間の綿密な予定表を作成し、予定内容の完成度をチェックする。
- ③年度前半に論文の第二次稿を提出させる。
- ④年末に論文の内容、形式などを細部まで確認・修正し、論文を完成させる。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	学会発表の結果の検討	第1回	第二次稿の修正箇所の再確認
第2回	同上	第2回	同上
第3回	第二次稿作成のための報告	第3回	第三次稿の作成
第4回	同上	第4回	同上
第5回	同上	第5回	中間報告会の準備
第6回	同上	第6回	同上
第7回	中間報告会の準備	第7回	第三次稿のとりまとめ
第8回	同上	第8回	同上
第9回	第二次稿作成のための修正	第9回	同上
第10回	同上	第10回	最終稿のとりまとめ
第11回	同上	第11回	同上
第12回	同上	第12回	同上
第13回	同上	第13回	博士論文の完成・提出
第14回	論文構成、各章タイトルの適切性の再確認	第14回	最終試験の準備
第15回	第二次稿の完成	第15回	同上

到達目標

- ①所定の期限内に博士論文を完成すること
- ②独創性豊かな自立した研究者の養成

履修上の注意

論文の問題点の発見と解決を意欲的に取り組む姿勢を求めたい。

評価方法

博士論文の完成度と研究者としての自立性

テキスト

必要に応じて指示する。

授業概要

博士論文の執筆と報告を中心に指導を行う。

論文のテーマ・構成・各章の内容について再検討し、最終的な論文を作成する。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	論文のテーマ・方向性・進捗・今後の予定を確認	第1回	各章の執筆と報告
第2回	研究テーマの再検討	第2回	各章の執筆と報告
第3回	研究テーマの再検討	第3回	各章の執筆と報告
第4回	研究テーマの確定	第4回	各章の執筆と報告
第5回	論文構成の再検討	第5回	各章の執筆と報告
第6回	論文構成の再検討	第6回	論文発表
第7回	論文構成の確定	第7回	各章の執筆と報告
第8回	各章の執筆と報告	第8回	各章の執筆と報告
第9回	各章の執筆と報告	第9回	各章の執筆と報告
第10回	各章の執筆と報告	第10回	各章の執筆と報告
第11回	各章の執筆と報告	第11回	各章の執筆と報告
第12回	各章の執筆と報告	第12回	完成論文の提出
第13回	各章の執筆と報告	第13回	完成論文の発表
第14回	各章の執筆と報告	第14回	完成論文の最終修正
第15回	論文発表	第15回	最終試験の準備

到達目標

博士論文の完成あるいは完成に向けた準備を行う。

履修上の注意

論文の執筆と報告を徹底して行う。

評価方法

論文の完成度と研究姿勢

テキスト

適宜指示する

授業概要

「特別研究指導Ⅰ」および「特別研究指導Ⅱ」を踏まえて研究指導を行う。3年次においては、先行研究を踏まえつつ独自の論点を提示できる博士論文を完成させることを目標とする。そのためには、早い時期に2本程度の個別研究論文を書き上げることが必要になる。また、論文作成を通じて自立した研究者となるよう指導する。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	博士論文の研究テーマの確定	第1回	論文作成・報告
第2回	目次の最終確認	第2回	同上
第3回	文献リストの最終確認	第3回	同上
第4回	論文作成・報告	第4回	同上
第5回	同上	第5回	同上
第6回	同上	第6回	中間報告会資料作成
第7回	中間報告会用資料作成	第7回	同上
第8回	同上	第8回	論文作成・報告
第9回	論文作成・報告	第9回	同上
第10回	同上	第10回	同上
第11回	同上	第11回	同上
第12回	同上	第12回	同上
第13回	同上	第13回	論文の提出
第14回	同上	第14回	残された課題の整理
第15回	同上	第15回	最終試験準備
第16回	研究まとめ	第16回	同上

到達目標

- ・博士論文の作成
- ・研究者としての自立

履修上の注意及び予習・復習

- ・自らオリジナリティのある論文の作成に努力すること

評価方法

- ・自立した研究者としての研究姿勢を評価する。

テキスト

- ・適宜指示する。

授業概要

特別研究指導Ⅰ、Ⅱでの成果を踏まえ、この特別研究指導Ⅲでは、博士論文の完成を指導する。博士論文の完成は並大抵の努力ではおぼつかないが、ここでは、受講生の努力を前提として、内外学会の水準を凌駕し、内容的に国際的に通用できる博士論文の完成を指導する。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	前期へのガイダンス	第1回	後期へのガイダンス
第2回	博士論文の現段階に関する報告と討論	第2回	海外学会における動向の再検討
第3回	博士論文の現段階に関する報告と討論	第3回	海外学会における動向の再検討
第4回	単独論文の作成と指導	第4回	海外学会における動向の再検討
第5回	単独論文の作成と指導	第5回	海外学会における動向の再検討
第6回	単独論文の作成と指導	第6回	海外学会における動向の再検討
第7回	単独論文の作成と指導	第7回	博士論文内容の章別点検
第8回	単独論文の作成と指導	第8回	博士論文内容の章別点検
第9回	博士論文章別校正の再検討	第9回	博士論文内容の章別点検
第10回	博士論文章別校正の再検討	第10回	博士論文内容の章別点検
第11回	博士論文のための追加調査の計画と討論	第11回	博士論文内容の章別点検
第12回	博士論文のための追加調査の計画と討論	第12回	博士論文内容の章別点検
第13回	博士論文のための追加調査の計画と討論	第13回	学術論文完成のための指導
第14回	博士論文のための追加調査の計画と討論	第14回	学術論文完成のための指導
第15回	博士論文のための追加調査の計画と討論	第15回	博士論文完成報告

到達目標

博士論文のための追加調査の遂行、国内外学会動向の再点検、博士論文の一部の個別論文としての刊行を通じ、日本語で書かれる博士論文であっても、内容的に国際的に通用力のある博士論文を完成させることを基本目標とする。

履修上の注意

博士論文の一部を単独論文として刊行することは、博士論文完成の里程標である。このためには、国内外の学会に参加し、学術論文刊行の機会を探索することが必要となる。

評価方法

基本的に博士論文の完成が評価の基準である。

テキスト

<参考図書>

薄井和夫「マーケティング史研究におけるマーケティング概念の多義性について」拓殖大学『経営経理研究』第106号、2016年、169～207ページ。

Kazuo Usui, *The Development of Marketing Management: The Case of the USA c. 1910-1940*, Aldershot, UK:

Ashgate, 2008.

Kazuo Usui, *Marketing and Consumption in Modern Japan*, Abington, UK: Routledge, 2014.

Kazuo Usui, "Precedents for the 4Ps idea in the USA: 1910s- 1940s", *European Business Review*, Vol. 23, Issue 2, 2011, pp. 136-153.